

「外務省の役人共の不甲斐なしめ、かうしてくれる」と勇敢な武勇振りでも外務省の役人をなぐつた志士を捕へて見れば、張作霖の張の字も知らなかつたとの事、これが神様のあらたかな御指示でなくて何だ。直隸派を助けるといふ噂を聞いて、思も怨みもない飛行士をグザと刺したことなども、神様の効能と解せずしては、我等の頭では分らない。

これ程のあらたかな神様は、八百萬も神様があつて、世界の何處に比してもこの點で、引けは取らぬ日本でも、餘り類はないやうだ。鯛の頭や狐が神様任用令も適用せずに、直ぐ神様になる日本だ。關帝様の看板をお借りして支店でも設けたらどうか。

苦しい時の神頼み、その神様には今のところ關帝様が一番だ。(十三・十・九)

37 一金と馮玉祥

一體金で交換出来ない何物か、この世の中に存在するだらうか。主従の関係などは、夙くに金で代へるやうになつた。名譽職も、貴族も、地位も、その多寡にもよるけれども、金で買へる時代となつた。貞操が……結婚が金で買へるなどは、金色夜叉のお宮さんの頃から、餘りに明白だ。然らば何物が金で買へない？……少なくとも馮玉祥君は、かうした疑問を、持つてゐるに違ひない。

馮玉祥君といふのは、いふまでもなく支那に於ける一方の大將である。昨年まで、吳佩孚君と天下を三分の一位して自分が握つてゐた。突然、吳佩孚君と張作霖君とが喧嘩を始めた。それまで吳佩孚君の相棒をしてゐるやうに見せかけてゐた馮君は、喧嘩の絶頂といふ時、寢返りを打つて、後方から吳佩孚君を追つた。張君の懐から、百萬に近い金が、馮君に渡つたといはれる。

馮君は有名なクリスチャンである。自分は勿論、その有力な部下も、酒は決して飲まない。かれ

が行くところその町に禁酒令を布く程の厳格さである。兵隊は朝晩讚美歌を歌つて、神に祈りを捧げる。第五夫人、第六夫人と、金平糖のいほのやうに多い方が貴まれる細君も、かれはたゞ一人で我慢してゐる。

その馮君が、お金の顔を見ると、十錢で買へる達磨のやうにコロリ／＼と轉ぶのである。今度もかれは張家口に在つて、張に轉ばうか、吳に轉ばうかと轉ぶ方向を考慮中とある。——そこで馮君が発するであらう前の疑問に返る。世の中に金で買へない何物かあるか——と。もし世の中の何でもが金で買へることに決まつてゐるとすれば、自分の態度を金で買ふ事が何故非難されるのか？と。

クリスチャンの名に眩惑された歐米人は、始めかれを支那唯一の聖人のやうに見てゐた。それがあの事件以來、かれのクリスチャンに「いはゆる」を附け出した。憐れなる歐米人よ……馮君はかういふであらう。……世の中に金で賣つてはならぬものがあるのか！と。(十四・十二四)

38 — 支那の騒動と車夫の話

支那で日本國旗がズタ／＼に裂かれた。領事館が焼かれた。日本人が何人も殺された……十年前なら戦争の原因にもなり得る大問題だ。昔はもつと小さな問題で香港は英國のものになり、青島は獨逸のものになつた。

「さうか、大變だな」「支那にも困つたもんぢやないか」感激性の血を多分に持ち合せて居る筈の日本人が、今回の、あの大事件にはかうした茶話の程度で問題を聞き流してゐるのを、私は不思議中の不思議と思つてゐる。血一つ流れない對米問題に、眞一文字に腹かき切つた「無名志士」を持つ日本がだ。

東京に居る或る支那人の實話である。先頃、といつても去年の事だが、かれは横濱に行つて人力車に乗つた事がある。七十翁が、あばたにでもなつたやうな震災道路を、かれは車上で揺られながら目的地に着いた。

「いくらだい」と聞くと「ヘイ〇〇錢でようがす」といふ。「馬鹿に安いぢやないか」大概の場合に、拂ふ方から言ひつこのない言葉が、この支那人の口から洩れた。「そりやね、旦那、旦那は支那のお方でがせう。どうせ日本はアメリカと戦争しなくちやならんのですから、その時にはお互は同盟國でサア、同盟國人には車代だつて勉強するんですよ。」

その支那人はかう言つて、近頃日本に於て、同國人に對する人氣のい、事を説いた。車屋の志士は、切腹した志士のやうに、思慮も、智識も、判断も、頗る淺くはあるけれども、併し風車が、風の方角を示すやうに、日本人全體の大體の向き方を示すには十分だ。

弱いもの、反抗には、笑つてすます強者の心理、アジア人のアジアといふ考へ方、排斥が日本人だけでないといふ自己満足、段祺瑞、張作霖といふ親日派の天下だといふ慰安、かうした事情が幾つも重なつて、あの支那の大騒動に日本人が眼をつむつてゐるのであらう。

火事や騒動は騒いだつて鎮まらない、私は現今の日本人の態度がい、と思ふ。

〔十四・六・十七〕

39 一雙方を笑殺しろ

ロシアの勞働代表が日本に来て、警官隊の監視に追はれて歸つたといふので、眞赤になつて憤慨する人よ、一寸待つてくれ、おれだけはその憤慨の仲間入りは御免蒙る。おれはむしろ笑ひこけるんだ。なんとといふ面白いことだ。

大庭柯公が日本の密偵だなど、云つて、貴重な一つの魂を暗から暗へ葬つたのは、何處の官憲だ日本の軍人だと見ると、無暗に危険がつて、牢へぶち込んだり、護送したりする國も、アジア近くの何處かにあると聞いてゐる。

おれは最近シベリアの一部を素通りして來た。團體として旅行したので、官憲もあらゆる便宜を與へてくれて、その點は心から感謝してゐるが、併し一人で旅行すると、寫眞機は駄目、望遠鏡は危険、スーツ・ケースは底の底まで調べて、印刷物が一枚でも出やうものなら、衛生官がコレラ菌でも捜すやうにカツとなるのださうだ。

あの茫々たるシベリアの野をレンズに撮すのを、絶対に禁する労働ロシアの官憲の神経過敏振りを想像してくれ、十銭か二十銭も出すと繪葉書が東で買へる町の風景や、人間のむれを寫真にとることが、勞農政府顛覆の陰謀で、もあるやうにいきり立つ心事を考へてくれ。

この勞農官憲の態度を頭の一方に置いて、さて改ためて、二人の勞農代表者を、數百人の警官が取巻くといふ光景を描いてみる。東洋の官僚國と、歐洲の官僚國（異つた立場からだ）と、何處が違ふ？

滑稽角力の大關は、何と云つても今のところ、兩方の官憲が引き受けてゐる。一方を攻撃するは片手落、己むなくんば双方を笑殺しろ。（十四・九・二）

40 一嘲笑病患者

東京市會は濟で、市會議員はその中を泳ぎ廻る鰻か鱈だ——新聞や人の噂は少なくともかう相場を決めてゐる。「それだから目の明いてゐる者は市長になど出るな」と現に東京に住んでゐる者が、隣村の寄せ相撲に出るか出ないかといふ程の無造作で市長問題を片づけてゐる。

市會議員が、大して利口でないことには、まづ賛成しておいてもいゝ。ブライスなども代議政體の一欠陥として、偉大な人物を選び得ないことを、疾くに指摘してゐる。けれども市會議員や代議士が、外の部落に住んでゐる野蠻人であるかのやうにいはれると、頼まれもせぬのに、議員連の助太刀に出たくもなる。

鳩山を呼んで來い、小島を呼んで來い、磯部を呼んで來い。そしてその傍に君の好きな普通人を呼んで並べて見ろ。市會議員は君の普通人に比べて、大して見劣りがするか。醜惡だと云ふけれども彼等の肩書には、賭博場主だの貸席主だのとはなない。無教育だといふけれども彼等の學校は、君

の普通人よりも上だ。破廉恥も成る程といひたいが、前科何犯とまでは、戸籍が汚れてゐない。

さアこゝだ。君の冷罵も御尤も、嘲笑も更々無理とも思はぬが、しかし明らかな一事は、かれ等も君の普通人に比して決して劣つてはゐない事だ。つまり彼等は矢張市民のレベル以上なのだ。……もしさうだとすると君等は如何なる人物を目標として罵しり、嘲けつてゐるのだ。

泉は水源より高く上らない、君等は瓜の蔓から茄子をならせやうとしてゐるのか。君等の代表は善悪共に君等を代表すればいい、ではないか。そしてこれがまた君の一票を彼に投じた所以じゃないのか。

日本人は多く嘲笑病患者だ。鏡に見入つて自分の顔を罵倒するのが、市會を罵しる彼等の姿だ。しかも彼等は嘗て罵倒の種を除くために努力を試みたことがあるか。(十三・十四)

41 流行の人口問題

政黨の「新政策」といふもの程天下泰平なものはない。とにかく大きな聲をして、騒いでさへ居れば、それで大概用が足りるのだから、辻で叫ぶ鮎屋などよりも餘程樂なわけだ。

その一つが人口問題といふやつである。斷つておくが、女の頭の恰好に流行があるやうに、和服の精柄に時代の變遷があるやうに、國家的大問題とか、政黨の新政策といふものにも、絶えず流行不流行がある。一三年前までは農村振興といふ題目が流行つた。それから續いて産業立國といふものが出て來た。その後に来たのが人口問題だ。今のところこれが流行界の寵兒である。

「國家の存立に關するやうな大問題が、それ程早く解決出来るか」など、聞くものがあつたら、それは世にも稀な馬鹿者だ。「政策」といふやつは、大きな聲ばかりしてゐればいいのだ。具體案などは會て少しも示さずに、手先で誤魔化す手品師のやうに、次から次と舞臺面の新しい題目を出してさへるれば大まかな國民は、それで満足してゐるのだ。

人口問題だつてさうだ。「一年に七十萬人づゝ人口が増加した」……など、こゝ迄はお粗末ながら統計があるから景氣がいい、が、そこからは出来損ひの幽霊のやうに消えてしまふ。多くは移民として送り出すといふにあるやうだが、七十萬人は愚か七萬人も送り出せたら、失禮ながらお目にかゝらない。

移民、移民といふが、第一何處に送り出すのだ。相手の都合や、僕も考へずに、たゞ「お客に行け」と言つたつて、それが出来るものかどうか。自分の立場しか分らないのが、官僚や政客の常とはいひながら、たまには相手の身の上にもなつてみるがい。

併しこんな事も、眞面目にいふのが馬鹿。流行はまた直ぐ移り變るであらう。日本で政治家たることは、盲目の前で踊りを踊るよりも樂だ。(十拜、七十三)

42 一十萬圓の行方

今度の貴族院議員の選挙費は大概十萬圓見當だといふ。新聞記者をしてゐるからこそ、紙の上では、「面倒だ。十萬圓以下は切り捨て、しまへ」など、景氣のいいことをいふが、實は自分自身のお臺所の問題になると、十萬圓は愚か、その十分の一の額も、恥づかしながら、銀行の窓から見たことがあるばかり。

その大きな金が、議員の選挙費に要るといふ。一體なんだつてそんなに要るんだらう。日本中の自動車を借り集めて夜晝乗り廻したつて、そんなに使へはしまし、依頼狀を金の巻紙に刷つて配つたつて、少ない有権者だ、十萬圓の半分も要りはしまし。

然らば一體、この巨額の金はなんに使ふのだらう。新聞にも公然書いてゐるくらゐだから、まさか後めいたいことに使ふのではなからう。「かれは賄路を、幾らく使ふさうだ」とか新聞で書いたら、それでなくとも光る警視廳の眼だ、黙つてゐなからうではないか。

それに孔子様も「恒産あるものは恒心あり」とおっしゃった。多額納税議員の選挙といへば、選ぶ者も選ばれる者も、それこそ粒よりの大金持である。この人々が、どうして理由のない金をやつたりとつたりするもんか、殊に投票を賣るといふことは、法律上からも道徳上からも、また公民としての義務としても、天下の卑劣事、不法事である。日本の上層社會が、こんな連中だけで充されてゐるとは、何としても考へられぬではないか。

ぢや、その十萬圓といふ金は何のために要るのだらう。クロス、ワードが流行の世の中だけれども、これほど分からぬことは、タンとあるまい。諸君、一つこの難問を解いてはくれないか。但し前にも言つたやうに、金のあり餘るこの連中が、候補者から山吹色を貰つて、知らぬ顔で猫バ、をきめ込むやうな、下等なことは、神かけてありつこはないのだから、この點は餘り、われ等貧乏人根性から、分らぬ疑ひはかけぬやうに願ひする。(十四・八・二七)

43 田中男の借金事件

政治家は政權が欲しい、大將になつても、男爵になつても、子供が鉛筆を欲しがるやうに「政權」を欲しがる。併しこれを得るためには、政黨に入らねばならぬ。政黨に入るためには金が要る。田中大將は盛に持參金の出所を物色した。

金が貯まつてしまふと、實業家は、一家の榮譽のために爵位や肩書が欲しくなる。丁度神戸の大金持で、金で肩書を買ひたい人が居た。「政權」を得るために金が要ると、「肩書」を得るために金をやりたい人と、二人の話が直ぐ纏まるに不思議はなかつた。何十萬圓といふ金は、右から左へと渡された。

五錢の味噌を買ふのにも、御出入りの御用聞きがあつたりして、天下一や、こしい日本の商賣にこれ程簡明な取引きはあまり類がない。「總裁」といふ商品を三百萬圓で買ふ。併しその金がないから、これを他日、「政權」を取る時に支拂ひ得る「勅選」乃至は「男爵」といふ手形で、金貸

しから調達したといふのだ。

金の世の中といふけれども、一國の宰相の印綬も、華族の榮爵も、これ程明らかに金で賣買出来る商品であることを示されると「金の世の中」の意味が最も明瞭に徹底する。これからは一層手続きを簡單にするために、三越の小賣部にも頼んで置いて、總理大臣金五百萬圓、男爵三百萬圓、とでも賣り出すことにするか。

それにしても反對黨の事だと、かうしてお勝手許の事まで、あることないこと暴き出す黨人根性はどうだ。血で血を洗ふといふ言葉があるが、彼れ等は、反對黨の事を暴き出す事により、毫末でも自己の潔白が社會から認められると思つてゐるのか。

既成政黨は自ら墓の穴を堀つてゐる。それだけは明らかである。唯問題は、新しい健實な新興勢力が、これにとつて代るべく起りつゝ、あるか否かである。私はまだこれに對し「然り」といふ勇氣がない。(十五・一・十七)

44 二人一體の後藤伯

遠くから見ると一人で踊つてゐるやうだし、近くによつて見ると、どうやら二人のやうでもある分らぬのは後藤伯の舞臺姿である。

後藤伯といふ一人の人間の中に二人の人間が生きてゐる。一人は後藤が持つて生れた理想主義者ロマンテストとしてのかれで、いま一人は醫者として科學者としてドイツの教育を受け、その後の政治的境遇から出來上つた實際主義者としてのかれである……かうかれの親近者は言つた。

かれは口を開くと「新興勢力」をいふ。新興勢力とは青年を意味するだらうが、青年の勢力を説くかれの年齢を數へて見るがいゝ。實際青年の勢力を信するほどの人ならば、自分が乗り出す代りに、青年を出すのが本筋ぢやないか。

財産も投げ出す、生命も要らぬ……さう觸れ出したかれの誠意を私は疑はない。大臣業や志士業をやつたものには、時々さうした感激が起り得るものだ。併しそれだけの決心があつたら、何故青

年をして天下をとらせるやうに仕組んで進まない？ この邊に老人達によくある「おれが」といふ自惚と、二重人格のかれが顔を出してゐる。七十歳の後藤伯が舞臺で踊らねば、教はれないやうな日本なら、たれが出たつて救済は覺束ないだらう。

單なる政界革新運動だと思ふと、コツそり西園寺公なんかに傳言を頼む。大衆を相手にすると思ふと既成政黨に渡りをつける。素人の寫眞屋のやうに、一向フォーカスの合はないところに「二人の内に二人が生きる」後藤の面目がある。

それ許りではない。試みにかれの陣營を覗いて見ると、鎧冑の武士があるかと思ふと、新式ハイカラ洋服姿がある。神武天皇に返らせる建國祭の永田と、太平洋を一足飛びにでも越えたい英語演説の鶴見と、どう妥協すれば歩調を合せて進み得るのだ。

かれ自身も、かれの運動も、かれの陣立も一つの胴體に二つの頭が動いてゐる。どちらがどう進むのか……モット政策が明らかにならなければ、われ等としては判断すらも下しやうがない。

(十五・四・十一)

45 陸軍の活動

憲兵隊が「社會主義搜索隊」を設けたさうだ、甘粕事件で勇名を天下にとろかした陸軍が、再びこの方面で活動しやうといふ趣向である。「搜索所」またの名は「志士製作所」と申し待る。

この陸軍は自分の鼻へは、何人も口を入れる事は許さない。間違つて師團半減など、いはうものなら、鳥小屋に猫でも追ひ込んだやうに、「素人」とか、「國防の大方針に」とか、大概の臆病者なら聲だけ聞いても氣絶する程騒ぎ廻る。

まアい、。一年に二億圓もの金を食ひ、二十萬近くの働き盛りの人間を遊して置くのだ、「俺が俺が」ぐらゐの己惚がなくて何にならう。由來、世間見ずの職人には己惚が付きものだ。

ところが、この連中世間で黙つてゐるのをい、ことにして、兎角自分の習つたこともない領分に出す。手を出したがる。「お一チニイ」をやるつもりで、思想問題にも嘴を入れ、ば、外交問題にも手を出す。

社會主義——殊に日本に在るやうなデモ主義を、どうかせねばならぬことには我等において異論のありやう筈がないが、日清戦争や日露戦争に出征する氣で、主義者とみれば甘粕つたり、打つたり、切つたりされては、第一近所隣りが迷惑する。

支那に行くに軍人達が外交官を素人扱ひにして、のさばり返つてゐるのが目に付く。國內では教育の機關も「俺が流義」にやれと、ふんぞり返る。一層總理大臣や、文部大臣や、外務大臣を廢してしまつて、軍人に何でもやつて貰つたらどうか。

天下が泰平で、軍人連、劍を磨かざる事久し！健康な若者が無爲で寝てゐると、女房の頭でも毆つて見たくなる。罪は天下が泰平なるにある。道樂に何處かと戦争でも一つやつて見るか。

(十三・十・二五)

46 宋の農夫の話

隣の田の苗はズントのびて行つた。青い繪の具を蒔いたやうに、畠の土が持ち上るやうに、その苗には恐しい生氣があつた。自分の田の苗はと見ると色が悪くて、育ちが貧弱で、高さもその半分しかなかつた。宋の話である。

農夫はそれが不満でならなかつた。「隣のあいつに負けてたまるものか」さういつて、彼は或日苗を一つく抜き出して隣の苗と同じ高さにした。測量師が測量機械でも覗き込むやうに、かれは横から見たり、縦から見たりして、隣の畠と同じになつたのを喜んだ。「こんな分別が何故もつと早くつかなかつたらう」かれは自分の頭をボンと打つた。

家に歸つて、かれは鼻高々と女房や子供に、自分の智慧が一日にして田の苗を隣のそれと同じに成長させた事を吹聴した。半信半疑で子供が走つて行つて見た。同じ背丈である筈の苗は、亂れ姿の女のやうにベツタリ地に倒れて枯れてゐた……孟子にある話である。

私は従来、人力車だけは日本人の發明だと思つてゐた。汽車も、電車も、電燈も、何もかも、廣に障るが西洋の發明で、これらに對する日本人の寄與は何もないが、併し人力車といふ便利なものは日本人の發明になるものだと思つてゐた。昨年支那を廻つて、その印象記にも、そんなことを書いたことがある。

最近ある西洋人の書いた本を読んで、その人力車も、明治の初年に日本に來たある外人宣教師が發明したのだと知つてがっかりした。一體日本人は、文化生活のために、何をあみ出した。わたしは本を読んでゐながら、肩をつほめた。

また西洋かぶれといふだらう。かぶれでない人は、外國で出來た汽車や汽船には乗らないか……そんなことはどうでもい。問題は宋の農夫のやうに、教育、經濟といふやうな地盤も出來て居らないのに、それ普選だ、それ國防だと、隣の田の苗と肩を並べること許りに、浮き身をやつし過ぎやしないかだ。(十四・五・二十)

47 肥えた人と瘦せた人

豊年の米俵のやうに大きな野田大塊さんと、瘠地に生えた竹のやうに細つほい元田肇さんあたりと、市街自動車に乗つて、ポケットから一枚づつ七錢の切符を拂つたとする。階級思想はこゝから發生する。

英國にチエスタートンといふ有名な批評家がある。朝起きたら「お休みなさい」といふのが本當だとか、白は結局黒であるとかといつたやうな論法で、世相を撫で切りにする皮肉家だ。この人がある時電車に乗つた。皮肉家だつて、電車といふ便利なものを利用するのに不思議はなかつた。

その内に乗客が澤山立て込んだ。婦人たちも取りてきが横綱にくひ下るやうな格好をして下り皮にぶら下つた。チエスタートンは立つて、婦人に席を譲つた。かれのあけたお尻の空間には、三名の婦人が座つた。かれは自分の身體と、婦人のそれとを等分に見て、あの皮肉な目をクリ／＼と廻した。

今度イタリーのビレフランカドアスチといふ町で、珍らしい租税徴収法が發明された。地租委讓説などは出たか出なかつたかは聞き洩らしたが、火の車の財政状態は何處かの國も同じであつた。そこで町の議員や役員が頭をしほりあけた結果、租税を體格によつて徴收することになつた。

一貫匁の豚は、二貫匁より安いやうに、二十貫の人間は、十貫の人間の二倍の税金を支拂ふのだ十貫の殿様と、二十貫の家來とでは、疊の切れ方や、路面の損害は、どうしたつて家來の方が多いそれだのに家來は十錢しか出さないで、殿様は五圓も出すのは、理屈が合はないとでもいつてみれば、如何にもそれも理屈だ。

三人前の場所を取る野田さんと、三分の二前で樂に事足りる元田さんと同じ賃銀では、何と言つたつて不公平には違ひない。一面世の社會主義者諸君に、大いにこの不公平を攻撃することを勧告すると同時に、他面政友本黨に新稅案の名案として御採用方を御相談する。(十四・七・一)

48 — 警察の「高等」と「下等」

「特別高等」とか、「高等係」とかいふから、辯當屋の符牒か何かだと思つたら、警察で社會主義者や、朝鮮人を取扱ふ連中の別名ださうだ。

親子井にだつて五十錢のもあれば、七十錢のもある。既に巡查高等あり、下等なからざらんやだ社會主義者や鮮人を追廻すだけが警察の全部だと聞かぬ以上、これが高等なら、泥棒をつかまへたり人民を保護したりする方は「下等係」に違ひない。

「高等」は鮮人や主義者係り、「下等」は人民保護係り、とかう相場が決まると、今の警視廳のやり方などが、よく胸に落ちる。汽車だつて二等三等と並べてお金が同じならば、一等に這入り込むに決まつてゐる。警視廳に高等と下等がある以上、高等の方に法外に力劑を入れて、下等の方を御留守にするのは人情の自然だ。

銀座で何か爆發する、警視廳始め警察といふ警察の神経が針のやうになる。何か不穩文書がまか

れる。平凡な雑報體でゆくと「廳内俄かに色めき渡り」東京が滅亡してしまふ程の大騒ぎをやらかす。警察道徳を知らないわれ等の頭ではとても分かつたことぢやない。

不穩文書といふものは見た事はないが、謂はゞ一種の廣告に違ひない、何か理屈をつけて、「かうしなければならぬ」といふこと位のもので、自分の商品を讀め立て買つてくれ、といふものと違ひはない。

勤められたものを總べて買ふものでないといふことが分る人には、人間の頭が人の宣傳などですぐ動くもんかといふ事が分るはずだ。……現にオギアと生れた時から忠君愛國を宣傳されながら、近頃の青年はとかくいかんと慨嘆してゐるぢやないか。

高等、下等が第一の間違ひだ、俺は高等の宣傳文書は恐くはないが下等の泥棒はほんとに恐はいのだ。

49 一軍縮會議を開け

こゝに毎年一億圓の資本を出す人がある。この金を無利子で運轉して、その上に血氣盛りの壯丁を八萬人、一日五十錢そこん々の給金で使用し得るチャンスがありとする。これがあなたの算盤にどう乗るか。……この不景氣に馬鹿な事を、と頭から蹴飛ばしてはいけない。血の出る程正味正銘の話だ。

一億圓が一年一割の利益を生むものとするれば一ヶ年一千万圓になる。それに一人の壯丁が二圓づゝ蹴出すとして一ヶ年五百八十四萬圓。どう内輪に見積つても、併せて一千五百萬圓の利益が生れて、しかも元金には手がつかずに済む。

この不景氣に耳寄りな話だといふのなら、すぐ實行出来る事だ。それはわが國の陸軍を半減するにある。その上に海軍を半減すれば、同額以上の金が生れて、教育費國庫負擔だの逓信従業員優遇問題だのは、テンで吹き飛ばやうにして解決して仕舞ふ。

この議論を「空想」だと「單純」だとか罵しる人に、私は今のやうな軍備の重荷を負ふて日本が何年一等國としての地位——文化的經濟的の實力を保持し、この瘠世帯を繼續し得る確信があるかを聞いて見たい。

幸に軍備縮少の機運は熟してゐる。日本現下の經濟状態を知る者は、日本が世界の何國よりも、この會議の必要を認めねばならぬ筈だ。日本は何故に積極的にこれを利用しないか。

軍縮會議とは他國の命令を聞く會議ではない。御互が相談して軍備を縮少する會議だ。米國なり英國なりが日本に危険だと思ふ者は、進んで日本に危険ならざる程度まで、軍備を撤廢せしめればいゝのだ。

おれも裸體になる。君も素裸體になれ、かう主張して軍備會議の意義は始めてある。さうして金持に對する貧乏人の強味はかくして生れる——軍備縮少の會議開催の機運を日本先づ促進せよ、これが日本の如何なる問題よりも急且大なる問題である。(十三・十二・十二)

50 — 大臣の支那旅行を勧む

大臣諸君、議會で意地悪くいぢめられた後、つゞいて西園寺詣りでお疲れのこと、存じます。西園寺詣りを笑ふ人もありますが、その鶴の一撃で萬事が決します以上、雇人が主人に忠實でなければならぬやうに、會社員が社長に従順であることを必要とするやうに、この大本山への參詣はまことに利口な仕儀と存じます……少くとも、これを非難する聲に耳を傾ける事が、その人に實際的利益をもたらす時代がくるまでは。

西園寺詣りもいゝ。選挙區への御氣謙伺ひも悪いとはいはない。たゞ私はその旅行を少し延長して、大臣自身が朝鮮、滿洲、支那方面にも出かけて貰ひたいと思ふのです。これには二つの理由がある。一つは日本のため、他は御自身のためです。

私は總理大臣の別荘を一つ湘南あたりにでも建てておくべきだといふ主張を持つて居ります。それは英國の首相別邸がチエツカーにあり、米國大統領にはメー・フラワーといふ快航船があるやうに、

重大な劇務に携はる國務總理に安息所が要るのは當然過ぎる程當然であります。同じ意味で閑暇を得て、短かい海外旅行を企て、一種新しい気分を養ふのも、決して非難すべきではないと存じます。

けれども、もつと重大な事は、大臣として支那滿洲を觀て來て、一面日支の親善を圖ると同時に他面日本の對支政策を立つるために直接知識を得べき點にあります。事大主義の支那人が日本の大臣を迎へて、如何にこれを重視すべきかは想像に難くありません。

西洋では大臣の外國旅行は、極めて普通の事とされてゐます。然るに日本に於ては、大臣になると尻が重くなつて、たかゞが西園寺邸か選舉區にしか行きません……もつとも御手近の待合などにはよく御旅行になると聞きますが、……その證據には、曾て大臣の海外旅行といふものを聞いたことがないではありませんか。この旅行も三ヶ月も四ヶ月もに亘る風流旅行では困りますが、支那滿洲にだけは、この際誰か——濱口さんか幣原さんあたりが、是非出かけられたいと希望する次第であります。(十五・四・五)

51 — 貴族院の腐敗の原因

貴族院村に何やらゴテくがあつて、それが帯や、袖で隠しきれなくなつたのは、去年ぐらゐからのことである。

一人一黨を標榜する昭和クラブが生れる。それに續いて研究会に地震がある。近衛公たちが脱退する、……貴族院のことは何が何やら分らないものでも、かう並べて來ると貴族院村に何やら事件が起つて居ることは感ずるであらう。これについて思ひ出すのは昭和クラブが生れる前、私の屬するある會で、この問題の中心人物二人を招いて、その意見を聴取したことがあつた。この二人は(無論華族である)は盛んに貴族院の六かしい事混入つてゐることを説いて「貴族院に十箇年も出入してゐる新聞記者でも、貴族院のことを少しも知らない。誤解はそこから來る」と云ひ、代りあつて三四時間も話した後で、「もう十時間もなければ貴族院の概観すらもお分りになるまい」と口を結んだ。そこで私は聞きかねて、「憲法に明記し、國民の批判の前に存在する貴族院が、十箇年も出入

してまだ諒解し得ないやうなものであれば、國民は恐らくその存在と、貴下のいふ改革を支持し得ないであらう」といつたことだつた。

何故貴族院が、これほど小面倒な混入つた存在なのか。それはそこには純理と主義がなく、あるものは情實と事大主義だけだからである。試みに貴族院を動かしてゐたといふ（研究會は最大多数黨だから、同會を動かしてゐたことは、即ち貴族院を動かしてゐたことだ）青木信光、水野直兩子のことを考へて見給へ。世間は嘗てこの兩子の政見といふものを聞いたことがあるだらうか。かれ等が經濟問題について如何なる識見を有し、社會問題について如何なる政策を有するかについて何處かで發表でもしたことがあるだらうか。

元來、政黨政治といふものには何の特長がなくとも、少なくとも一つの特長がある。それは議會に席を占めるほどのものなら、その懐く政見を國民の前に發表し、國民の批判の前に立たなければならぬことである。これは政治學のイロハでも習つたものなら、誰でも知らぬ筈のない明瞭な事實である。そして世界の如何なる國でも、これに例外はない。然るに日本だけでは——少なくとも貴族院に關する限りにおいては、政見や政策は菜葉漬け程度の用をもなさなないで、たゞ運送會社の番頭みたいに、朝晩となく自動車に乗り廻して、權門と會員の門を叩きさへすれば、それで有力者

になれるのである。こんな間違つた、時代錯誤の存在が、今の世の中にあり得るものではない。

然らばかうした間違ひはどうして來たか。第一には無論制度の罪である。この制度を創めた伊藤博文公は「慎重、練熟、耐久の氣風を代表」するものとして「貴紳を集め」て貴族院を造つたのである。伊藤公がこれを研究し、創めた明治の初めにおいては、華族が「慎重、練達、耐久」の氣風即ち道德的に一般の國民より優れてゐると思つたのは、或はやむを得なかつたかも知れない。併し間違ひの原因は衆議院には解散があつて、貴族院には解散がないことである。殊に日本のやうに國民の政治的自覺が發達せずして、總選舉においては必ず政府黨が勝つといふ國柄にあつては、政府としては衆議院などは少しも恐くない。恐いのは非解散の城壁に隠れて、ニタリ／＼しながら虐められる貴族院である。それもこの貴族院が眞向から政策で打當つて來るのなら、政策を以て相對する方法もあるけれどもねぢけ婆の嫁いぢりのやうに、感情と意地だけで攻め寄する以上は、喰はずに利を以てするより外はないわけである。これが青木信光その他の研究會の連中が、十年も出でない内に揃つて大金持になつた理由である。

世間では水野、青木等の失脚を以て、貴族院が革正されたと思つてゐる者が多いやうだが、こんな馬鹿な觀察があるもんか。貴族院が衆議院と同等の權限を有して、しかも非解散といふ城壁に立

てこもつてゐる以上、その牙城はビクともするものでない。當方は撃たれつこなしに、暇に任せて先方だけを狙ひ撃ちにしてゐれば、餘程の下手でも、又餘程の悪い小銃でも、結局効果があらうではないか。貴族院は今の制度が續く限り決して改革されることはない。

第二に貴族院の腐敗と動搖は、その構成分子が華族が主となつてゐるからである。誰も知らやうに華族は封建制度の本家本元である。それは徳川三百年の間、幕府の絶對專制に服従して嘗て嘴を挟まなかつたところの「服従」が第二の天性となつた人々である。この人々の傳統は強いもの、位置の高いものには常に卷かれる點にあつた。故に彼等が如何に従順に、その會の中心人物の命令に従ふかを見給へ。今回の内紛後の常務員選出に當つてすらも、選挙によるに非ずして、相談役の指名で満足した。政界でこんな古い頭の所有者の揃つてゐるところが、何處にあるものか。たゞ今回の經驗により彼等は愚圖々々さへいへば、相當に會が動搖し、自分もその殘肴にありつけるかも知れないことが判つたので、將來は頻々としてお家騒動が續くであらう。

第三に貴族院の腐敗の原因は政黨——政友會と民政黨の罪である。彼等は清浦内閣の當時、貴院改革をその旗印として奮闘し、これを國民に公約した。然るに彼等がいよく政權を握ると、何れも忘れたるが如く何等この點に力を盡さない。貴族院とても群雀ではあるまいし、豆鐵砲には驚

かない。

以上の理由は何れも大きな貴院腐敗の原因ではあるけれども、併しこれ等よりもつと重人な原因は國民がかうした事に眞剣な注意を拂はないことである。政黨と雖も、もしこの問題について國民の支持が得られることが分明すれば彼等は屹度突貫するのである。然るに現在の國民の政治知識ではこの邊が心許ないのである。英國の自由黨は三度び議會を解散して、徹底的にこの問題を解決したが、それは國民に自覺があつたからのことであつて、何處でもさうといふわけにはいかない。

いつも云ふところであるが政黨は國民の鏡である。餘りに政黨を罵することは結局これを選出した自からを嘲罵すると同じである。貴院改革の聲は國民自身の深いコンヴェイクション（確信）から生れねばならぬ。（昭三・一）

52 官製國の日本

四六

今度、婦人青年會が出来た。無論内務省の肝煎によつてである。誰がやつても成功しないものが時の政府が聲をかけると直ぐ成立するところに、日本人らしい特長が見られる。それは婦人會だけの話でなくて、男の青年會も悉く然りである。

「日本人は集ると、きつと演説をして、それから寫眞を撮る。米國人は集ると直ぐ委員を作る」といふ言葉がある。誰が云ひ出したか知らないが面白い言葉だと思ふ。日本人は随分集りもし寫眞も撮るが、會の維持や進行のことになると世界一下手である。誰が主催者になるとか、發起人が誰だとかと一揉めして、さて集つてみると「近頃はお寒くなりました」「どうも御無沙汰してゐます」といつた挨拶だけで散會し、一體何のために集つたか要領を得ない場合が多い。そしてその會も三四回以上續いたら餘程成績のいい方である。

ところが、かうした會に不得手な國民も、大臣か何かのお聲がかりがあると直ぐ立派な會が成立してしまふ。床次さんの肝煎で出来た青年會のやうな大がかりな會は世界にも餘りない。また在郷

軍人團のやうな立派な統一團體は他に比類はない。今度出来た婦人青年會も、役人が力瘤を入れる間は大いに榮えよう。煙草が官製、鹽が官製、鐵道が官製、その上に團體まで、みんな官製だつたら日本は立派な官製國になるわけだ。

この言葉が極端だと思ふものがあつたら事實を見るがい。日本で有力な會や財團法人で政府の息のか、つてゐないものがあるか。前述した青年會や在郷軍人團が、それ／＼内務省や陸軍省の延長であると同時に、放送局は逓信省の出店であり、國際聯盟協會は外務省の支店であり、海事協會は海軍省の一分課だといつてい、即ちこれ等は何れも政府といふ動脈に通ずる一枝線で、時の政府の鼻息を伺ふ以外に、大して用のないものである。だからこれ等の會には屹度役人の古手が来るこれは一つには役人達が自己を護るために、豫め退職後の逃場を造るといふ不埒な考へからであるが、今一つはこれ等の會や團體が既に政府の出店である以上、これと聯絡をとるために、古番頭をこれに向けることは何かと便利がい、に違ひないからである。かうして日本には同じやうに考へ、同じやうに行動し、創造も發明もない社會が生れて来るのである。

これが米國邊だと違ふ。バートランド、ラッセルなどにはせると米國の文明は會議精神から生れたものだといつてゐるほどだが、それ程會議の盛んな國である、官製の團體などは殆んどない。否

その殆んど總べてが下から礎いたもので、政府から監督される代りに、政府を監督する役目を持つてゐる。日本の團體が上から垂れ下がる葡萄を以て例へることが出来れば、米國のそれは土から上に向ふ筈にでも比することができよう。徳川時代の、まだ上から治められる習慣がぬけず、「政府」といふ棚にばかり頼る葡萄根性は、決して日本國民の名譽ではないと思ふ。(昭三・一)

53 — 迷信公行の社會

われ等は一體、昭和二年——明けて昭和三年の聖代に住んでゐるのだらうか。

近頃の新聞を見ると、どう最負目にみても昭和二年と並べて考へることが困難な事件ばかりである。東京府下小松川に住んでゐた某といふ女が精神に異狀を來したが、家人はこの婦人が狐につかれてゐるものと信じ、みこを呼んで祈禱をして貰つた。みこは何か祈りながら、この婦人の兩手と首を縛つてはけしく全身をもんだ。狐を追ひ出すためだといふのである。幸ひにその狐つきの女の騒ぐのは止つたが、憐れむべし、衰弱し切つてゐたかの女はこの荒療治に堪へないで死んでしまつた。翌日、警官が改めて見ると小骨が二本折れてゐたさうである。

こんな記事もある。箱根蘆の湖畔の顔役のところ、ある日女修業者が來た。そしていふことは「私は二十年來諸國を修行して歩くものだが、駒形神社の傍に如意輪の觀音様が土中に埋つてゐるといふ神のお告げだから來た」といつた。顔役は不思議なことに思つて掘つて見ると果して觀音の像があつた。そこで今度町では新靈場としてお堂を立てることになつたといふのである。

さうかと思ふと江戸の真中で小判を掘る話もある。京橋區弓町で、昔先祖が藏の下に小判を埋たといふ書きつけを頼りにして、某といふ婆さんが中心で土地を掘つた。さかきを立て悪魔を拂ふ準備宜しくあつて、さて惣と二人連れの若い衆が何人もかゝつて掘りくり返した。婆さんは脇目もふらないで見据えてゐる。秋雨が遽しく降つて婆さんも、人足も濡れ鼠のやうになつた。併し結局掘り出したものは、白い土塊にすぎなかつた。

この悠長な、封建制度丸出しの光景を頭に畫いておいて、さて他方の舞臺を憶出して見るがい、そこには普選が敷かれて、無産階級の進出が叫ばれてゐる。そこにはマルクスの資本論が何十萬部とか賣れて、教科書すらも讀めない學生が、辯證法だの理論闘争だのと晩秋の竹藪に雀でも群つたやうにガヤ／＼云つてゐる。即ちそこには理論あり、科學あり、電車あり、自動車あり、すべての文明の形式が備はつて居るのである。

かうした異なつた二つの日本を、同じ時代と同じ場所に並べて考ふことが出来るであらうか。考へても見給へ、みこを使ひ、觀音様を掘り出すその同じ場所は、マルクスをいひ、社會科學を云ひ世界の總ゆる知識と發明と科學とが、處を得顔に濶歩して居るところではないか。その同じ東京の真中に、まだ人間の身體の中にきつねが宿るとか、「神のお告げ」が存在することを、眞面目に

信じて居る者が決して少なくないのだ。文明都市の一度はいだ底には數ふべからざる無智と迷信が潮のやうに流れてゐるのだ。

われ等はこの事實を記憶することを要する。われ等の國家はこの無智と迷信を包んで進行せねばならぬ。國家は船である。賢き者先きに走り、愚かなる者後に残ることを許さない。進む時は共に進み、退く時は共に退くのだ。そして經世家の目標とするところは少數の識者でなくて、多數の衆愚でなくてはならぬ。理論闘争はこれを書齋の閑學者に委せよ。われ等の問題は大眾を如何にするかの點になくてはならぬ。衆愚が波浪のために沈没する時は、少賢も亦同じ「日本」といふ船で底に沈む時であるからである。(昭三・一)

54 — 新聞と公人の名前

田中首相の人事行政は極めて感心しないもの、一つである。ことに朝鮮、關東廳の如きは、その統治下に異なる民族を抱擁して最もデリケートなる注意と、進歩的な頭腦を必要とするのである。單なる彈壓政策、國家主義的政策は、十年も以前においてさへ寺内總督が失敗した。この意味において、われ等は山梨、木下兩氏の起用を、近代の最も悲しむべき事件なりとの豫感を覺えるのである。

併しこの人物論とは別にして、われ等は近頃の輿論——特に新聞が、公人に對する相當の敬意を拂ふに缺くるところがあるのを悲しまざるを得ない。これ等の人の動靜を傳ふる記事を見給へ。山梨半造氏を呼ぶに「山半」を以てし、木下謙次郎氏を呼ぶに「木ノ謙」を以てしてゐる。鐵道大臣小川平吉氏は「小ガ平」の方が通りがよく、民政黨總務松田源治氏は、いつすし屋を始めたとも聞かないのに「松源」を以て書かれてゐる。

公人に對する批評には遠慮があつてはならない。われ等は日本の輿論がこの人々に對して、どん

なに嚴格であつてもいゝと思ふ。併し近頃の新聞雜誌で見る前記のニツク・ネームは批評でもなければ、ユーモアでもない。たゞその記者乃至は筆者が、獨りでその公人を輕侮して自から樂しむといふ程度な低級な野次心に過ぎないのである。そしてこの野次心理がどれだけその當人を不愉快にし、かつ公職に對する世人の輕視を惹起して、社會的に害毒を流すことであらうぞ。

外國でもニツク・ネームはある。たとへばクレマンソーを、「タイガー」(虎)といふ如き、ニュー・ヨーク州知事を「アル・スミス」といふ如きがこれである。併しながらこのニツク・ネームは決して當人の人格を傷つける如き名を用ふるをゆるさない。これは西洋諸國においては個人の名譽と立場を重んずること非常に嚴格で、苟くも輕侮の念を起さしむる如き呼稱は、法律上の制裁に訴へても許さざるが故である。

日本とても何もこれが尊ぶべき風習であると思つてゐるのではない。行商人に對しても「オイ山半」といへば、かれが從順に答へるかは疑問である。また「小ガ平」といつて敬意を表する所以でない事は何人にも明らかであらう。然らば何故かくの如き呼稱が漸次流行になつて行くか。第一には定見なき批評家乃至は記者が、せめてさう呼ぶことによつて自から優越感を感じんとするのであり、第二にはこの國においてはまだ個性に對する尊敬が諒解されず、切り捨て御免的な蠻風がある

事等をあけることが出来よう。

いよ／＼議會期節が始まつて、またこの低級な名前の呼び方が流行するであらう。蝙蝠安とか、キヤラメルとか、奇聲居士とか、それがわれ等のために政治を行つてゐる人々の別名である。こんな下等な名前が議會と新聞を横行してゐるところが何處の國にあらう。そしてこれがどれだけ知らず識らずの内に道德的悪影響を及ぼしつゝあることであらう。問題は小に似て、決して小なりといふことはできぬのである。(昭三〇一)

55 一 舊日本の再現と暴行

帝國議會の暴行事件で暴行議員が、懲役或は罰金に附せられたと同じ頃、東京の市會では議員間に擲りあひがあつて、負傷者數名を出し、ある者はその場から病院に運ばれた。その暫らく後で廣島縣會でも暴行の結果血が流れた。岐阜縣會にも暴行事件で司直の手が動いてゐる。大阪でも岡山でも暴力に近い混亂がある。石川縣下では役場の移轉問題から知事が襲撃された。

かうして議會及び公人からまる暴行事件が頻出する一方、一般社會における暴行沙汰も、決してその數の少なきを悲しまない。野田醬油では両者が睨みあつて流血の慘事を傳へて居る。左翼の團體には右翼が暴行に押し入り、これに對して左翼團は同じく暴力を以て對抗するともいはれる。如何なる社會でも、二つの團體が相對して居るところ、そこに必らず暴力行爲が伴ふ。日本は正に暴力化したといつてもいい。

併しこの日本の暴力化を今更驚くものがあつたら、それはその人の餘程の無智を表明する。日本は今、日本主義の大流行である。大衆文藝といひ、講談といひ、武勇傳といひ、一般世俗に讀まれ

る讀物物語りは悉く昔の日本、武士日本の道德であり、人情である。そこには清水次郎長があり、國定忠次があり、忠臣蔵があり、天誅組がある。

その當時の道德と人情は何を最も力強く表象してゐるか。それは例外なく暴力であり、直接行動である。その目標とするところは無論立派な道德的なものであらうが、併しこれを實現する手段に至つては悉く暴力である一事は何人も否定できない。清水次郎長は太つ腹で、義氣に富んでゐたのは事實であるが、その強きをくじいて弱きを扶くる方法に至つては、暴力以外に何があつたらうか大石藏内之助以下の忠誠については何人も疑ふものはないが、この忠誠を盡すためには、かれ等は當時の國法を破り、吉良上野之介を直接行動によつて殺すことを可なりとしたではないか。

封建制度の最も大なる特長は、自己の意志を行ふのに直接に對手を壓迫するにあつた。そしてこの場合一方が他方を屈服せしめるには理窟によらないで腕力によるのを常とした。かりにこゝに二人の侍がありとする。二人は道で相逢つて、事の行違ひから喧嘩になつた。この場合「なにをこしやくな、いざ尋常に勝負せよ」とギラリと刀を抜いて果しあひをするのが、武士の習ひであり、又これが封建治下の道德である。然るにこの二人が意見の行き違ひがあつたら、兩方で委曲を盡して議論をし「それでは君と僕との意見が何れが正しいか第三者の判断を得ようではないか」と相携へ

て「多数者」乃至は「裁判官」の前に出て、その判断を仰ぎ、これに屈服するといふのが法治國——近代精神の道德である。

日本の昔の道德と人情に渴仰するものが、他人と意見が相違する場合、暴力に訴へるのは當然すぎるほど當然である。また日本の舊道德に對し極端に尊敬を有しながら、暴力政治を排するのは自己矛盾を免かれない。議會政治、多數政治のなかつた日本には、それに伴ふ道德もなかつた。現在の各方面の暴力的衝突は舊日本が、講談、大衆文藝等の影響により再出現したとみてい、と思ふ。

(昭三、二月)

56 — 右翼團體と暴力行爲

私はこの前に暴力行爲は舊日本の出現だと云つた。即ち昔の日本は「ツベコベ云ふのは而倒だ、いざ尋常に勝負をしろ」と何かと云ふと刀にかけて——現在の言葉で云へば直接行動暴力行爲に訴へて問題を解決したものである。この舊日本の精神を鼓吹し尊敬するものが、現に日本の各方面に見られる暴力沙汰を攻撃するのは、論理の一貫を缺くものだといふのが私の説であつた。

私はこの説に對して多くの反駁を豫期する。また世の中に反對のない説といふものがあり得るものでない以上、私は常に反對説を歓迎する。併したゞ、に何人も承認せねばならぬ一事は、暴力行爲が特に右翼——即ち舊日本の思想を推賞し、所謂國粹を主張する個人や團體に多いことである。その志しは随分と同情に値するけれども、彼等はその思想を行ひ、或は反對者を仆すのに常に暴力を行使して毫も顧るところがないのである。

東京帝大において反對の學生を襲撃して、流血事件を惹起した七生社といふものもさうである。同社は有名な國粹學者上杉愷吉博士が率ふるもので、かねて左翼的傾向の學生を憎んで、これに

「制裁」を加へたものが今回の事件である。更に他の團體の事務所を襲撃したある會も、矢張り右翼の團體である。鶴見の工夫の衝突といひ、親分同志の對峙といひ、教育あるも、教育なきも、舊日本を代表する人々が、兎角對手との意見の相違を直接行動を以て解決しようとする事實は、即ち否定することが出来ない。

それ許りではない。西洋思想に反抗して立つたこの人々の行爲は、常に模範的なものばかりだといふことは出来ないと思ふ。その一つの例は大東文化學院である。この學院は東洋の文化を確立するため、國庫の補助を得て、江木千之、小川平吉その他の國粹政治家が中心となり、井上哲次郎博士を院長として成立したものである。然るにその後お家騒動の絶え間なく、今回再び騒動の火の手があがつたやうである。

われ等がかう云つたからとて、右翼思想の行爲や結果が悉く悪いといふのではない。右翼思想の人々には兎角に直接行動を是認したがる傾向ある一事と、而して所謂國粹派なるが故に悉くが模範的だといひ能はざる事實とを指摘したに止まるのであつて、その思想の所有者の内に随分尊敬すべき人々が多いことは、元より申すまでもないことである。(昭三・三)

57 — 自殺に對する疑問

自殺といふものが、どれだけ國民精神の作興と關係があるか。更に自殺そのものは道徳上如何なる地位を占むべきものであるか。國民はこの問題に對して、明瞭に考へておかねばならない時代になつた。

近來自殺をするものが、非常に多くなつた。それも責任觀念から自殺するものが多いのである。軍艦神通の艦長水城圭次大佐の自殺を始めとして、來島丸船長村瀬喜五郎が同じく自殺した。また濱松では日本中學四年生石川重雄が學校ストライクの中間に這入つて板ばさみとり、結局自殺したといふ事件もある。あけて來るとこの種の事件は随分多いこと、思ふ。

これに對する社會の態度は、自殺に對して過分なる尊敬を拂つて居るやうにみえる。水城大佐に關する活動寫眞も出來、ある一部では神様に祭る企てすらもあるとのことである。われ等は勿論、水城大佐の責任感に對して深い尊敬を拂ふ。その責任を一身に負うて自及する氣持に至つては、肅然として襟を正さざるを得ないものである。たゞ併しながら問題は自殺行爲が、果して將來の國民

新しい日本に教へるに足るものであるかどうかである。私はこれについて自からの結論を述ぶることを差控へて、二三の問題を提示するに止めたいと思ふ。

第一 自殺ならば如何なる自殺でもい、といふのでないのは、多くは芥川龍之介の死を否定し、有島武郎の自殺を獎勵するもの、ないのでも明らかである。自殺がい、か悪いかの分れ目は、その當人の心理状態が何處にあるかの點から判断せねばならぬやうである。もしさうだとすれば重要視すべきは、その動機如何であつて、自殺行爲は必らずしも、大なる批判の對照になり得ないやうである。今のやうに自殺そのものに絶対價値をおくのは正當だらうか。

第二 水城大佐の公人としての責任は逃れることは出來ない。最後の判決はなかつたけれども、軍法會議は六百圓の求刑をした。この責任は自殺によつて直ちに解除され、却つて神にまで祭られるほどの聖淨になるのだらうか。即ち自殺といふものは、總べての責任を抹殺してしまふのだらうか。またその責任を果すのに自殺が採るべき手段だらうか。

第三 自殺は陛下の赤子として忠順なる方法だらうか。國家は一人の専門家、一人のインテリゲンシヤ（知識人）を生むのには、大變な犠牲と努力を必要とするのである。それだけかれは社會と國家に對し義務と責任とを有して居る。自殺はその志しは悲しいけれども、それは自からを清く

する方法に過ぎない。國家に酬ゆるためには、自殺を以て最上最高のものとするべきであらうか。

第四 かりに自殺がい、とする。然らば社會は何れだけこれを表彰し、而して世の人が、とつて以て勳鑑とすることを奨励すべきであらうか。世の中の善行は萬人以てこれを見習ふべきものであることを要する。われ等はこの自殺を、學生と青年に勸めることが出来るであらうか。もしそれが出来ないとするれば如何なる點までこれを實行的教科書として教へることが出来るであらうか。

第五 この自殺については、外國人がその眞精神を諒解し得ないのは疑ふわけにはゆかない。元來、思想と道徳は交通の發達するに従つて孤立を許さない。それは漸次國際的に標準化さるべき運命にある。この世界的思潮の前に、日本だけが永遠に特殊な道徳を守り得るであらうか。

一つの社會事象に對しては總ゆる方面から研究して、その是非を定めねばならぬ。私がこゝに以上數個の疑問を提出したのは、自殺に對してかうした疑問が生れ得ることを述べたに過ぎぬ。私はこの小論文では、謹んで私自身の意見はこれを述ぶることを避ける。私は讀者自身がこれ等の疑問に答へんことを希望する。(昭三・三)

58 — 華族制度を如何にする

華族制度といふものが、も一度表面の問題となつてゐる。普通選挙が施かれ、権利の分配……といふ文字は可笑しいが肥料の分配があるのなら、権利の分配もあらう……が公平に行はれて来た以上、注意が自然に特權階級に向けられるのは、けだし當然の勢ひであらう。

明治の始めに當つて日本に華族が出来たことについては、われ等は同情を以てみる事ができる。それまでは彼等は兎に角、優越なる權利と地位の持主であつた。たとへ世界が一轉して、封建制度は壊れ落ちたにしても、明治の維新が極端なる革命でない以上は、この人々にある種の特權を與へておくことは單なる政策の問題としても必要なことであつた。況んや彼等は長い間、自から國政を料理する衝に當つて居つた關係から知識においても、經驗においても、普通人に優つて居り、過渡期の日本を、この人々に託すことは是非共必要であり、又それがためには特權をも與ふる要があつたのである。

その當時はたゞ華族が特權を有して居つたばかりではない。その一段下には士族といふ階級があ

つた。明治も餘程後までは國政の料理——高等なる政治は士族でなければ出来ないと思はれた時代があつた。彼等は自から國政運用の重きに坐して、平民を見下してゐたのである。

それから約半世紀の歲月は流れた。議會制度の確立と、教育の普及は特權をこの人々のみに與へておかなかつた。否、實際やつてみれば士族と平民の間に、實力上區別すべき何の相違もなかつた。實權は何時の間にか士族から平民に移つた。われ等の子供の頃には一家の名札にも「士族」と「平民」とは劃然と區別されて居つたけれども、今時は餘程の田舎に行つても、士族の肩書を誇つて歩くものはあるまいと思ふ。

然らば何故これほど士族は簡單に平民の中に滑り落ちてしまつたか。そこには稱號こそ異なれ、制度上の特權がなかつたからである。即ち士族と平民の間には自由な競争が行はれ、士族は實力上平民の敵ではなかつたからである。自然淘汰といふ進化論的原則の故に不必要なるものは常に舞臺の上から隠れてしまふ鐵則が働いたからに外ならないのである。

平民と士族の區別は實際上もうなくなつてしまつたのに、華族だけが何故なほ社會の上層に頑然と控へてゐるか。實力上、華族と平民の間に相違があると思ふものは、かつて士族でなければ、重要な仕事は出来ないと思つたと同じ迷信である。それは何人にも分つてゐる事實なのに、何故華族

は依然として、特權階級の筆頭に位してゐるか。答へは頗る簡單である。それは彼等が政治上、貴族院に立て籠つて重要な特權を持つてゐるからである。この外に彼等が世襲的な財産を有してゐるのも一つの原因だが、併しそれだけでは恐らく社會の表面に出て、今の如く傍若無人の存在を示し得ないであらう。即ち華族はそのまゝ落ちんとする信用と威嚴を、法律によつて與へられてゐるところの持權を以て喰ひ止めてゐるといふのが現状である。

人間の身體が健康ならんがためには不用な贅肉を切りとつてしまふ必要があるやうに、國家が健全に發達せんがためには、不要なる部分を切開して、絶えず時代の進運に添ふことを要する。現在の社會においては何人も華族が歴史的遺物であるといふ以外に、その必要を主張するものはなからう。然らば今や、普選において政治的に國民を平等にならしめた以上は、逆に華族に對しても、その平等ならんことを主張する必要があるではないか。

そこで改革の方法は如何。私はまづ貴族院を改革して華族から政治的特權を奪ふことを主張するとして華族はこれを一代に限つて、しかもその稱號は單に社交上の便宜のためにのみ使用することを主張する。個人が如何なる稱號に對して敬意を表さうとも、それは國家の關するところではないのである。(昭三・四)

59 一 舊日本過讚の危険

新しいものを無條件に追ひ求めるところに非常な弊害がある、それは申すまでもないことである併しそれと同時に古いものに、餘りに多く執着するところに、重大な危険が存在する。私はかうした簡単な理窟について、世人が何故モット速やかに自覺しないかを考へて、常に不満を感じてゐるものである。

その一つの例は所謂チャンバラの活動寫眞の弊害である。從來日本においては教育界は勿論、社會一般も健全なる思想とは出来るだけ忠實に舊日本を取り入れることだと信ずる傾向があつた。故に四十七士は極端に尊敬され、清水次郎長は感激され、近藤勇は推賞された。彼等はこゝにこそ、日本の精があり、こゝにこそ將來日本を導くべき道徳があると思つた。堂々たる高官の後援で浪花節が奨励され、學校、軍隊に時代物の活動寫眞や講演が紹介されたのも、この精神の現はれにすぎないのである。

ところがこの「健實なる思想」が、近頃になつて必らずしも健實でないことが發見された。殊に

少年兒童に對する時代物映畫の影響は甚だ寒心すべきものがあつた。淺草の千束小學校五年生佐々木權太郎(二三)が、活動俳優阪東妻三郎の寫眞を前に飾つて自殺したのを始め、學校においても兎角直接行動に訴へる子供が多くなり、それが映畫の影響から來て居るものが多いといふ。この事實に驚いた東京市教育局は、各關係者と協議して目下種々對策を協議中である。

わが國の古來よりの道徳に尊敬すべき、また今後も保持せねばならぬ幾つもの美點あるのはこゝで述べるまでもないことである。併しながら從來の教育方針の缺點は、これを識別せずして舊日本全體を迷信的に注入せんとしたことにある。例へばこの例は忠臣藏である、忠臣藏においてはまづ始めに淺野内匠頭は吉良上野介に對し殿中で斬りつけた、その周圍の事情は元より同情に値するが併し殿中で刀を抜くことはお家様以來の法度である。徳川幕府の法律は、その事情の如何に拘はらず、法律違反者に對し嚴罰を要求する。それはその秩序のために必要なことであつた。そして淺野内匠頭の切腹は法律違反者に對する刑罰であつて、既に徳川幕府の存在を認める以上この刑罰の正當性は論理上これを承認せざるを得ないと思ふ。世人が吉良を憎むの甚だしき結果、淺野の行爲を承認するところに第一の誤謬がある。

この誤謬に出發したそれからの判斷は、悉く誤つてゐる。四十七士は復讐を決心して、これを

實行した。それは同じく國法に反するもので、如何にしても是認するを得ないものである。更に彼等はこの目的を達するため處女を欺いたり、地圖を盗み出したりした。これ等も從來の道德觀では立派な行爲のやうに傳へられ、説かれてゐる。目的は手段を正義化すとは洋の東西を問はず中世紀に流行した思想であるが、間違ひの原因は、そもくこゝにある。

誤解してはいけない。私は徒らに四十七士を攻撃するものではない。私の指摘したいのは、わが國人が兎角に目的と手段をゴツチャにして批評してしまふ癖がある點である。四十七士の忠誠と志の壯なるに對しては何人かこれを疑はふ。それは眞とに鬼神をも泣かしむるものがある。併し、その目的と志しがよかつたことは、直ちに手段がよかつたといふ事を意味しない。われ等はこの點の相違を明らかにして論ぜねばならぬ。い、目的とい、手段が合致して始めて模範的な道德は生れるのである。

私はこの文の始めに徒らに舊日本を追ひ求めるのは、危険であるといつた。何故なら社會の道德といふものは、その時の社會の状態によつて生れ出るものであつて、不變のものでないからである。従つて飛行機とラヂオの現代に、チャパンラを獎勵するのは、害あつて益なきものである。われ等は一般世人が事實に目覺めることを希望せざるを得ない。(昭三・五)

60 一 共產黨事件と爲政者

共產黨事件は世にも悲しむべき事件であつた。それが内容については、今現に司直の手にあり、われ等の知る範圍外であるが、假りにこの人々が總べて無罪になつたとしても、この一味の人々が無産階級の獨裁、階級闘争の激成等を目かけて居るのは餘りに明白な事實である。裁判の結果の如何に拘はらず、それが悲しむべき事件であることについては、われ等は心から田中首相と感を同うするものである。

元來、如何なる國家においても、暴力を以て社會の秩序を紊さんとする企てに對しては、決してこれを看過しない。言論の自由を以て鳴る英國などにおいてすら然りである。日本の共產黨員が謂ふが如き陰謀を企て、居つたのであれば、如何なる寛大なる論者といへども、政府のとつた方法に對し異論はあり得まいと思ふ。

併しながら、われ等が爲政者並びに社會一般の人士に不満を感じるのは、彼等が毫末も問題の根源に觸れて居らぬことである。田中首相はその聲明書において「痛恨骨に徹して熱淚の滂沱たるを

「禁じ得ぬ」といひ「身も心も打ち戦きて九腸寸断の思ひに堪へなかつた」といつてゐる。一國の首相の聲明としては少しく感傷的に過ぎて居り、形容の如きも支那流に墮して居りはしないかと思ふが、併し首相の意志のあるところは、元より同情し得るのである。たゞわれ等が懸念するのは、世の青年の多く——ことに左翼に傾く人々が、首相の聲明書を見て、首相と同感するや否やの點である。

例へば田中首相は盛んに「金匱無缺の國體」を唱へる、そして鈴木内相、小川鐵相の聲明も同じ文字を使つてゐる。この言葉に對してわれ等としては無條件にこれに共鳴し得る。併しながらわれ等と反對の立場に立つもの、社會の現狀に満足しないものは、ただ「金匱無缺の國體」とだけいつて、その言葉に承服し得ようか。彼等の多くが、不逞にも暴力によつて「革命を遂行する」ことを目的として居る事實が、この國を見るのに、田中首相と見を同うしないことを物語るものではないか。

われ等の平生信ずるところによれば、世の中で最も危険なことは、一つの思想を説明なくして青年に注入することである。何等内容の説明をなさず、また自由討議をなさないで、既成觀念としてこれを教へ込むことである。この場合、その通りに最後まで信仰し得れば結構であるけれども、何

等か根本觀念に動搖が來れば、かれは直ちに一つの信仰から他の信仰に移るのである。即ち思想的にいへば、一つの迷信を以て、他の迷信にかへるのである。

われ等は日本國の基礎がそれほど薄弱なものだと思はない。それは忌憚なき自由討議に立派に堪へ得るものなのである。われ等は國體の問題も堂々と自由討議の市場に引き出だし、その縦横の試験を経せしむべきものだと思ふ。この自由討議を経て、初めてその愛國心は磐石の上に立てられるのである。(昭三・六月)

61 魔除け祭事の弊害

大藏省ではかつて將門の怨靈が崇つたといふので、國費を以て盛大なるお祭りをした。その後更に内務省においては、同省が兎角高官に禍はひし、床次氏の夫人は死し、堀田、安河内、武藤各次官はいづれも在職中死亡し、甚だ縁起がよくないといふので、これも魔除けの祭典をあげた。

大藏、内務兩省が魔除けの祭典をあげると鐵道省でも黙つてはゐなかつた。小川鐵相も清浦奎吾頭山滿その他の諸氏と一緒になつて、奈良の大佛さまの三倍の觀音を大船驛前に立てるべく議を進めてゐるとのことである。そしてその目的は(一)觀音の大精神によみがへれ。(二)思想的國難を救へ。(三)日本は世界の精神的指導者なりとある。

思想的國難が大觀音の設立により救はれることなら、談何容易なるである。それは「國難」といふ如き業々しき文字を使用するに足らぬものであつて、その悪思想を放逐するために、數千萬圓の國費を支出して、村の辻々に大觀音を建立するのも少しも惜くないことである。併しながらわれ等から見れば思想的惡化といふ意味を、かくの如く簡單に見ること、そのことが頗ぶる危險なるこ

とであつて、悪思想放逐の基礎をかゝる點においては、永遠に解決の機會が來らざることを恐れるのである。

元來、われ等は世人が神様を餘りに濫用することを苦々しく思つてゐるものである。前述の記事が出たと同じ頃、新聞は大森の町民五千人は京濱運河に反對して、四里の道を行列し明治神宮に祈願したことを報じてゐる。京濱運河開鑿は一個の國策である。この國策を實行するに對し、これと利益を異にするものが、これに反對することは元より正當である。併しながらその目的を達するために明治神宮に祈願して示威運動を行ふことは決して純粹なる敬神の發露とはいへない。それは寧ろ聖地をけがすものである。

もしそれ大藏省、内務省がその崇りをおそれて、魔除けの祭事を行ふに至つては、これ國民に迷信を奨励するものである。魔とは何であるか、怨靈とは何であるか。近代の科學はかくの如き奇怪なるもの、存在を承認しない。とにも角にも科學を基礎とする日本の教育は斷じて迷信の横行を許さないのである。外國においては金曜日及び十三の數字を忌む風があるが、米國大統領ウィルソン氏は自からこれを無視して行動し、識者の賛成を買つたことがある。

日本は餘りに迷信の多きに悩んでゐる。かの丙午の迷信の如きは、如何に無益にこの年に空れた

婦人を苦しめてゐるか。世の識者、ことに朝に立つものはかくの如き迷信を打破してこそ然るべきに拘はらず、自からその迷信の信者であることを公表し、大袈裟なる行動をなすにおいては、社会人心に影響するところ決して尠少にあらず、甚だ悲しむべきことでなければならぬ。(昭三・六)

62 一 藝 者 亡 國 論

私は近頃信州に二三回講演に行つた。

その時の會員の話し(話しの主は確か青年會長白澤君であつた)が今もなほ私の記憶にこびりつてゐる。それは同じ明盛村でも、町に近い方面の青年は料理屋に通ふので、その地方は経済的に頗ぶる窮境にあり、青年を子弟に持つてゐる家で、借金のないところは全くないといつてもいいふのである。即ち藝者の誘惑は、農家のあがる収益を以ては到底辻褃があはず、法外なる借金をなし、窮極するところ一家の破綻に到るの外はない状態なのである。

私はこの話を聞いて、日本の疾患に打ち當つたやうな氣がした。日本の藝者組織がたゞに前に述べたやうに、人身賣買を默許する人道上の問題たるに止まらない。それは産業日本を破壊する魔の手である。試みに料理屋遊びの費用を檢し來たれ、如何なる田舎でも一回の遊蕩費は十圓を下ることはないであらう。この金は農家乃至は小商業家にとつては莫大な金である。それはどう算盤をとつても、利潤の低い仕事には不似合なる高價なるものである。これをふんだんに支出して、その事

業が行詰らなければ、それこそ寧ろ不思議といはねばならぬ。

かつて高田商會が破産した時に、同商會が「交際費」の名目の下に、料亭に費消した金が非常に多かつたことを傳へた新聞があつた。日本においては事務所で立派に話しをすましようることを、料理屋に持つて行く癖がある。この金は何處から出る？ それは生産費の一部を形造るものである。そしてこの結果は物價高を誘致する有力な原因にならざるをえない。

私はかつて支那、滿洲を旅行した。何處に行つても目立つて感じたことは、料理屋、藝者といふものが、その土地の日本人人口に比較して非常に澤山居ることであつた。彼等はその収益の少なからざる部分をこゝに持つて行つて費消してしまふのである。従つて何年経つても資本の蓄積が出来ず、日本人の發展は覺束ないのである。

私は藝者亡國論を叫ぶものである。私は地方において「藝者排斥同盟會」の如きものができるところを希望する、そしてその代りに讀書クラブなどが出来て、藝者に費消する金と時間を讀書にあてるべきを主張する。私は國を愛するほどの青年ならば、原則として、私のこの主張に反對するものがありとは信じえない。(昭三・六)

63 一類發する學校騒動

日本に假りに何の名物がないとしても、少なくとも一つの名物がある。それは學校騒動である。

最近の新聞によれば、長岡高等女學校の寄宿生三百名は四年生が主謀となり、六月十九日夜校内の電燈を全部消し、暗やみにして舎監青山教諭を襲ひ、口を極めて不公平を罵り排斥したが、急報によつて永井校長が駆けつけ僅かに取鎮めたとのことである。また山形高等學校では、七月から行はれる試験を延期するやうに生徒側から學校側に申し込んだが、學校側では斷然これを拒絶したので、學生代表者は會議を開き、改めて試験延期を申込み、學校側がもしこれを拒絶する場合には、全部同盟休校することを申合せ、紛擾中だとのことである。

試験を延期する、しないといふやうな問題のために、同盟休校を企てる生徒が世界の何處にあらう。その内には學問を教へるから同盟休校をし、授業時間があるからストライキをするといふやうなことにならないとも限らない(！)後世恐るべしとは正にこの事である。われ等はこの文において、その罪の何れにあるかを説かない。喧嘩は必らず兩方に云ひ分のあるものだから、恐らくは先

生の側にも多少の落度はあることであらう。併しその罪が何れにあるにしても、かうした学校の空気が社會に好ましからざる影響を與ふことは即ち同じである。

學校は學問を學ぶところであると同時に、精神を養ふところである。その人が後年社會に出て活動する基礎は學校において出來あがるのである。故にその修養時代において、自分の欲するところを暴力を以て貫徹する習慣を習ふ以上は、かれは社會に出でた場合に必らずこの同じ方法を用ふるに違ひない。そしてそれは必然に階級闘争を惹起するであらうし、また暴力に對して暴力を以て對峙することになるであらう。

悲しむべき態度とはこれをいふのである。相互に諒解と妥協の方法があるに拘はらず、心を喰しくして暴力を以て對抗することは結局人類を原始時代の状態に返すことである。故にわれ等はまづ學校において、妥協平和の思想を涵養せねばならぬ。それには具體案として如何するか。まづ第一に自由討論の風を起すべしである。何事に對しても自由に自己の意志を發表し、また對手の立場を聞いて、その上で進退を決するやうに訓練すべきである。第二には學校側と生徒側との間に、折衝機關を設けて、これをして熱議せしむべきである。

いづれにしても自由主義教育は、日本の學校に絶対に必要である。(昭三・八)

64 未青年の飲酒喫煙

國家に二つの危険なることがある。一つは法律の濫用であり、他の一つは法律の輕視である。第一の法律の濫用といふのは當局者が法律を濫用して人民に臨み、無用にして煩瑣なる迷惑を強ふることである。これは警官その他の行動において、われ等が時々實驗するところのものである。

第二の法律の輕視といふことは、法の明文が嚴然として存在するに拘はらず、これに對して何等注意もせず、これを實行せんとする熱意もなきことである。この一つの例は未丁年者に對する飲酒喫煙等に關するものであつて、これに對する法律があるに拘はらず全く勵行されず、銀座街頭、警官の前において公然として違法行爲をなし、何人も怪しむものがないのである。

かゝる人間の嗜好の問題について法律を以て規定するの可否は無論問題になり得る。米國において禁酒問題が今なほ賛否の激論跡を絶たず、甲論乙駁してゐるのもこれがためなのである。併しながら何人も異論がないのは、既に正規の手續きを経て法律となつた以上は、これを實行するに怠慢であつてはならぬことである。新聞の傳ふところによれば、當局者は最近になつて初めて十六七

歳の中學生までが、キャプエーにおいて飲酒喫煙をなし、その弊害の甚だしきを知り、場合によつてはこれに刑を課することに決定したとのことである。

われ等は法が眠つて居つてはならぬと思ふ。これを極端に亂用することは前記の如く弊害があるけれども、もし法律が悪習を矯め得るものとすれば、これを公平に利用することは是非共必要である。(昭三・八)

65 芥川氏の自殺

文人芥川龍之助氏は劇薬を飲んで自殺した。自殺は如何なる場合、如何なる動機からでも冗談ではない。私はまづこの死な、ければならないまでに突きつめたかれの心持に、深甚な同情を表する。

その夜、自殺者の枕頭には多くの親友が集まつてゐた。その群の中に一高時代からの舊友久米正雄氏が居つたことは無論である。久米氏はあの黒い顔を、嚴肅そのもの、やうにして「かれの死を普通一般の自殺と見て貰ひたくない、かれの死はどこまでも性格であり、人生觀そのものであつた。死の思索、死の哲理の前にかれは死んだ」と盛んに芥川氏の自殺を哲理化し遺書の中に、「僕の知つてゐる女人は僕と一緒に死なうとした」とあるのを「女人といふのは細君のことだ」と話しその舊友の自殺を、是が非でも哲人の死にしてしまふほど一生懸命になつてゐた。友人の末期を飾らうとするその心持には、私は元より同感も出来、また敬意も表す。

併し芥川氏の自殺は、果してそれほど普通人の自殺と異なるものだらうか。私はさう思はない。

現にかれ自身もその動機を「僕の場合は、たゞボンヤリした不安である」といひ、またわれ等がかれの遺書を読んでも、結局死にたくなつたから死ぬので、高い哲學などは何にもないといつて、たゞ多少頭を使つたのは、死ぬ方法であるが、これは最後まで藝術家らしい——即ち美醜の觀念に鋭敏であるかそれらしい考慮を用ひただけである。併しこんな事は何も藝術家の専賣ではない。昔西洋で自殺が流行した時に、當局者は「その死骸を街頭に引いて廻る」と發表して食ひ止めたことがあるが、死後の自分のダラしない姿を想像する時に、出来るだけこれを美化したいと思ふ心持は何人も有するものなのである。

もしかれの自殺が普通のそれと異ならず、そして普通の場合に自殺が非であるとするならば、芥川龍之助氏が、文人であるといふだけの理由を以て、これを是認しジャスチファイすることが出来ないのは元よりである。殊に私は、同氏の自殺から左のやうな、反省すべき教訓を得ることから思ふ。

第一には日本の所謂文士といふもの、多くが、何といふ神経的な病的な精神及び肉體の所有者であるかといふことである。芥川氏は自から「氷の様にするわたつた病的な神経の世界」に住んで居ると遺書に書いたが、それは眞に病的な世界である。この病的な神経から生れる文藝といふもの

が、若い青年に絶大な感化力があることを思ふと、われ等は懼然として恐れざるを得ない。

第二には彼等の世界が如何に狭いかといふことである。——も少し失禮な言葉を使ふことが許され、ば、かれ等が如何に無學であるかといふことである。彼等は限られたる讀書をなすの外、多くは芥川氏の遺書の中にあるやうに「賣笑婦と一緒に」話し逢ふことが生活の全部である。そしてこの體驗の全部が彼等の藝術であり、しかも彼等はこれを目して人生最高のものだと云つてゐるのだ何といふ僥越だ、これを外國においてウエルスとかシヨールとかいふ人々が、小説家、劇作家たる以外に、一流の評論家、學者であること、比較して來ると、雲泥の差のあることを感ぜざるを得ないであらう。

第三には彼等が如何に自己主義で得手勝手主義であるかである。これは彼等の知識と社會が狭くて、自己第一主義に墮した當然の結果である。芥川氏は藝術至上主義の主張者だと聞くが誰でも自分の従事してゐる事業を最高至上のものだと思ふ心理には同情出来るにしても、これが極端になる結果は自分が住してゐる社會に對する因果と義務を無視することになる。かれが遺書に「家族達に對する同情などはかういふ慾望（死ぬ事）に對して何でもない」といふ如きは、この自己絶対主義の當然の現れであつて、「勝手な時に勝手に死んで誰に悪いか」といふのがかれの結局の論理な

のである。

第四には多くの文藝家の頭脳には、論理的な點で缺陷があることである。こゝでこれ等の例を引照するスペースはないが、彼等の議論は何時でも自分勝手に、殆ど論理の系統をなして居らない。芥川氏の『或る舊友へ送る手紙』もさうである。自分が發した質問に、少しも自分が答へて居らない。それは一種の獨り言である。天才は片輪だといふが、科學時代に這入つた現代では、文藝家は決して片輪であつてはならない筈である。

要するに芥川氏は純然たる病人である。その病人はこの社會で戦つて行くに堪へなくなつて、死んだのだと見るのが最も公平な觀方だと思ふ。さはれわれ等はその遣された家族に對しては心からの同情を表するものである。そしてかう率直に書くことは『正直に書かねばならなかつた』氏と、氏の家族に同情のないことではないと思ふ、（昭三・九）

66 圓タクと人力車

産業文明の進むところ、その道には悲慘な犠牲者が取り残されるのを常とする。圓タクに食はれた人力車夫の生活問題などが、その著るしい例である。

諸君が最近の東京の町を歩く時に、一つの顯著な現象に打ち當るであらう。それは嘗つては何處の道の隅にでも屯して居つたところの人力車が、今や殆んど影をかくしたことである。誰が彼等を追ひ拂つたのでもなければ、また誰が彼等を迫害したのでもない。彼等は彼等の周圍から追ひ追まつて来る産業文明——機械文明のために、彼等の職業を荒され、これと太刀打ちすることが出来ずして、慘めに敗退を餘儀なくされたのだ。

八月廿三日、東京區裁判所へ一つの訴訟が提起された。それは人力車夫の寺井正東といふものが同じ職業の長岡正二を訴へたものである。新聞の傳へるところでは兩人は同じところへ落合ふ車屋であるが、圓タクの流行と不景氣で、とても耐らないので客があつたら不當賃銀を吹きかけようと長岡が持ちかけた。それを寺井が應じなかつたので、對手は亂暴にもかれを擲りつけて負傷せし

めた。その上、十日ばかりこれがため休んで出て行くと、長岡は「お前が休んだのでお蔭様で二人前の仕事が出来てよかつたよエヘン」と嘲つた。餘りなことに人の良い寺井も腹を据ゑかねて訴へ出たといふのが、その筋である。

事件としてはたわいのないものであるけれども、併しわれ等はそれを單なる街頭の瑣事として見逃がせない氣がする。それは古い日本と新しい日本との接觸點に散つた火花である。それは悲しむべき事ではあるにしても、結局東京から日本全國に及ぶべき時の流れである。この流れを早く氣付いて善處するところにのみその人の成功が待つて居るであらう。(昭二・十)

67 疑獄事件と政治家

「代議士といふ商賣は、悪いことをする人のための仕事ですか。」かういふ質問が、どこかの小学校の生徒から、出たかどうかは知らないが、假りにかうした言葉が頑是ない兒童の口から發せられたら、先生は何と答へるであらうか。

近頃の新聞を見るがい、。大きな活字の醜聞は例外なく……といつてもい、ほど政治家、代議士の關係するところである。前總理大臣、政黨總務といつた人々が次ぎ／＼に法廷に立つた松島遊廓事件については、こゝではいはない。その後われ等の眼にふれたものだけでも片方の手では數へ切れないほどあるのである。

三萬圓横領嫌疑で突如大竹翁召喚▲我黨内閣を種に二十萬圓の怪聞、山本農相を引合に出した西岡前代議士▲吉原代議士けふ召喚さる。▲戦時共産會不正事件で牧口前代議士、一兩日に召喚。▲黒部川の不正事件について檢事出動、或は前閣僚に及ばん。

これ等の人の中には無論お氣の毒なものもある。たゞ取調べを受けたといふだけで、新聞に大袈裟

に發表されて、随分迷惑を蒙つたものもあるやうだが……そして新聞社としては随分不謹慎な話だが、……併しそれにしても、一部の政治家の行動が、もぐらもちのやうに光を避けて闇ばかり追ふ事實のあるのは否定できない。

代議士とは何も前科者ばかりの寄り合ひではない。いな鬼に角選りに選つて土地の徳望家なり識者なりを選ぶのだ。それなのに何故かう代議士といふと、不正業者の別名かのやうに響くに至つたのだらう。理由は極めて簡單だ。彼等にとつては代議士は金で買つた肩書である。すでに金で買つたのである以上は、この肩書を以て、使つたゞけの金を取り返さうとするのは當然といへる。また實際問題としても五萬圓使つて、三千圓の歳費では親譲りの蔵が幾つあつても堪るものではない。幸ひなことに、この肩書は利権に近づき易い。猫に鯉節、つい手も出したくならうではないか。

併しかうした場合に、もし國民の監視の眼が光つて居れば、代議士とて將來の自分の位置が惡いから手を出すものではない。然るに一般國民はかれの行動を少しも監視しないばかりでなく、それが當然であるが如くに見て居る者が多い。かつて刑務所に居つてそこから立候補の電報を打つて立派に常選したものがある。國民の多くは金を多く引き出し、造り出す政治家を以て、「腕がある」といひ、然らざる政治家を「馬鹿正直」ぐらゐに片づけてしまふのが現状である。

「あの男は政治家ではないよ」といふ言葉を解剖し來たれ。多くの場合においてそれは金を造り得ない政治家を意味するのではないか。何といふ正義の觀念の缺如だ！ 何といふ惡を憎む觀念の缺乏だ！ 日本の饑饉は食糧でも教育でもない。Justiceの觀念の饑饉が、現在の混濁な社會を持ち來たしてゐるのだ。不正代議士の頻出は、誰の罪でもない、國民自身の姿である。

(昭二〇一)

68 一東京の自動車不安

毎日の新聞に自動車事故の記事の現はれない日はない。女優の中村歌扇が轢かれたといふ記事の翌日には若山醫學博士が重傷を負ったといふ記事がある。その次ぎの日には小學校の兒童が殺られたといふ報道が眼につく。かうした新聞に出る記事は恐らくは、全體の何割にしか當らないであらう。自動車不安の日が、いよく東京の町に現出したのを物語るものである。

この原因は無論澤山ある。無責任な運転手が、不注意に大道を疾驅するののも一つの原因であらうし、道がせまくて人間が混んで居ることも、確かに交通事故の多い原因であらう。併しわれ等はここの原因を、もう少し深いところに搜りたい。即ちこれに文明史的批判を加へたい。

私はこれを機械文明の殺到から生れた悲しむべき犠牲だと解釋してゐる。日本は長い間、鎖國をして居つた結果、交通などに對する設備は何にもない。道路のないのは無論として、第一國民の交通に對する知識と準備は何にもなかつたといつていい。そこへ突然汽車が來、電車が來、自轉車が來、自動車が來たのである。日本人は今まで道といふものは隣りの家との區劃ぐらゐに思つてゐた。そ

の證據には一本の道を左右にして一方の側が宗右衛門町で、一方の側が尾張町といふやうに、家を中心にする一區劃には名があるが、道路には名すら與へられてゐない。これを歐米でまづ道路を造つて、それを中心に町が出来るのとはまるで異つてゐる。日本の町は District (區) とでも譯すべきものであつて、英語の Street とか Avenue とかと譯すべきものではない。

かうした日本に突然機械文明の産物である交通機關が來たのである。謂はゞ何にも準備のないところに持つて來て、極めてデリケートな機械が殺到したのである。そこに犠牲と混雜があるのは寧ろ當然である。併し當然ではあるが犠牲は出来るだけ少なきを必要とする。直ちに新しい交通法の案出をなすと同時に、新しい町には將來の交通問題を考へて豫じめ都市計畫 (タウン・プランニング) をなすことが肝要である。

69 蔣介石君に答ふ

蔣介石足下。

あなたは東京に來られて、その第一聲として「謹んで日本國民に告ぐ」といふ聲明書を發表されました。このあなたの呼びかけに對して、日本國民として一應これに答へるのが、禮だと信じます。私は私個人だけを代表してあなたに答へたいと思ひます。

私は第一に日本國民が、あなたを迎ふるに如何に親切丁寧であるかを申しあげたいと思ふ。いふまでもなく足下は何等の官職を帯ぶるに非ず、また何等の機關を代表するでもない。謂はば一個の漫遊客乃至は亡命客といつてもいゝのである。然るにこの足下に對して日本國民は實に國賓に相當する注意を以てして居るのであります。これはわが國人が、外國といふと兎角重大視する習癖のあるにもよりますが、又以て支那に對して如何に親善を求めつゝあるかの證左とするに足ると信じます。

このわが國民の態度に對し、貴下はまるで凱旋將軍の概がある。その聲明においても年來「貴國

の人士が日華親善の道を講究し、その實現を期せられたるは疑ひなき事實なるも、惜いかなその道を得ざりしため今なほその實現を見ざるは、われ等の遺憾とするところである」といひ、それ以下一段高處にあつて、日本國民を教ふるの態度をすら示してゐます。もし日本國民が、かうした態度を支那人以外——たとへば英米人などに見せられたとしたならば、朝野は決して不快の感なくして看過しないと信ずる。この意味からだけでも日本國民が支那の國民に對してだけは如何に遠慮と好意を有して居るかを知らることが出来ると思ふ。

蔣介石足下。

足下が日本國民を教へられるについては、その言葉が甘くても苦くても、われ等は喜んでこれに傾聴するものである。併しながら唯一事足下に告げたいと思ふのは日本國民も全く愚かではない。正しきことはこれを受入れるけれども、正しからざる事、謬れる事は、これを鵜呑みに承認するわけにはゆかないのである。

足下の聲明の中に「由來、中國々民革命運動は……既に國民的獨立の精神を發揮し、各國の識者は皆その自由及び獨立の能力あるを公認せざるものなきに至つたのである。故に列國の政府が能く我が黨の主張を理解し、之に妨碍を加ふるが如き事なくんば、革命運動は決して今日の如く停頓の

状を呈せず、或は己に成功を告げたるやも知れないのである」とあります。果して然るか。支那革命の失敗は内部の暗闘と勢力争ひからでなくて、外國の干渉によつたのでありますか。現にあなたが總司令の職を抛たれたのは外國の壓迫によつたのでありますか。私は平生國際問題の研究家として、足下が今更かくの如き事を平然としていはれるのを見て、啞然として驚くのみであります。

事實を打ち開くれば、私は足下が日本に来て、まづ日本國民の前にその罪の許しを乞ふ事を期待して居つたものなのです。何故なれば例の南京事件は貴下の責任下において起り、また漢口事件も貴下に責任なしといふことが出来ないからである。しかもこれ等に關しては貴下は全く言及するなくして、却つて支那内亂の原因は列國にのみありといふに至つては、その斷定の大膽なる驚くの外はないのである。

齒に衣着せずして申しあげれば、支那人の缺點は自己の内省足らずして、事件の原因を常に他にのみ歸することである。故に事件が起きればその責任について他人をのみ責めて居つて、自身の責任はこれを問はず、紛擾は常にかうしたところに胚胎するやうに思ふ。あなたが日本國民に與へた公開状には、この同じ缺點が見られないでありませうか。

併し何れにしても、日本國民は常に支那國民の味方である。この點において足下は如何なる場合

にも日本國民をその友人の中に數へておいてい、と思ふ。あなたの言も相當に大膽であつたから、私の言も禮に添はないもの、あるであらうことを許して下さい。(昭三・十二)

第六篇 世界は動く

内 容

- 1 滿蒙と日米の立場
- 2 不戰條約調印の日
- 3 ムツソリニを辨す
- 4 漢口から見た米國
- 5 東京と大阪の相違
- 6 張作霖の最後

1—滿蒙と日米の立場

一 モンロー主義と日本

國際問題においては、一つの問題について長く、根氣よく執着してゐれば、それが何時の間にか國際間に認められるといふ特徴がある。この一つの例はモンロー主義であり、他の例は、もう少し狭い意味ではあるけれども、滿蒙における日本の特殊地位である。

日本は滿蒙に對するその特殊地位については、かつて自から毫末も疑ひを挿はさんだことはない。この事の可否得失については、政治論として無論大いに論ずる價值はありうる。併しながら實際問題としては、歴代の政府、政治家、責任者の間において、この事は問題になつたことすらもないと思ふ。對支政策については、その政黨及び當該大臣の態度によつて、多少の相違はあるが、事一度び滿蒙に對する根本問題に關するや、それは全然同一だといふことが出来る。

田中内閣がその成立早々、支那に對する態度を決し及び打合せをなしおく必要ありとなし、所謂

東方會議なるものを召集したが、その終了に當つて田中首相は、日本は滿蒙の治安維持に任ずる旨を聲明したのであつた。滿蒙といふ兎にも角にも支那主權の下にある地域に對し、日本といふ隣國が治安維持の責任を帯ぶるといふ聲明は驚くべき事であるが、併し田中内閣の決心は疑ひもなくそこにある。現に先に南北の衝突あるや、帝國政府は五月十八日、張作霖氏及び南方政府に覺書きを交附したが、その一部にはかうある――

「滿洲の治安維持は帝國の最も重視するところにして、苟くも同地方の治安を亂し、若しくはこれを亂すの原因をなすが如き事變の發生は帝國政府の極力防止せんとする所なるが故に、戰亂京津地方に進展し、その禍亂滿洲に及ばんとする場合には、帝國政府としては滿洲治安維持のため適當にしてかつ有効なる處置をとらざるを得ざることあるべし」

右の聲明によつて日本政府が滿洲の治安を保障してゐることは明らかである。謂ふところの「適當にしてかつ有効なる處置」とは何であるか、そして「治安」とは如何なる程度までを意味するかは、なほ後に残る問題であるが、併し日本政府の率乎たる決心に至つては即ち疑ふべからずである。

二 各政黨の滿蒙觀

併しながらこれは何も政友會内閣の專賣ではない。この前の憲政會内閣もそうである。同内閣は外相に幣原氏を有し、對支親善政策をとつて、その消極的態度を攻撃されたものであるが、併しその滿蒙に對する根本觀念に至つては、田中内閣との間に殆んど何等の相違もない。

當時の若槻首相は貴族院における質問に對して左の如く答へた。

「帝國の接壤地域であります所の南滿洲及東部內蒙古に於ける我が特種利益の確保擁護に關しましては、政府は常に深甚の注意を怠らぬ所であります。若し同地方の秩序紊亂の爲に帝國の康寧に影響するか如き虞のありまする事態の生じました場合に於きましては、政府は必ず適當の手段を講じて治安の維持に努むることに於いて萬違算なきを期する積りであります。又同地方に於きまして同胞國民の生命財産の安固を保持し正當なる我が權利々益を確保し國民の經濟的發展の助長に資することにつきましては、政府の最善の努力を致すことは申す迄もないことであります」(大正十五年三月廿四日貴族院において)

見るべし、對外強硬政策を以て鳴る田中内閣と、對外消極政策を以て稱されし若槻内閣との間には、その根本問題については何等の相違がないばかりでなく、その文字言語の使用法すらも同一で

あることを。もしこの兩者間に何等かの相違があるとすれば、それは根本問題の相違でなくて、單なる方法の相違といつてもいゝ程度のものである。

三 日本主張の根據

然らば日本が、かくの如く殊特地位を主張する根據は何處にあるか。これについては「日米兩國の滿蒙觀の相違」を検討することを以て目的とする本論において、詳細に述ぶることは困難であるが、大體左の數項に含まるべきものではないかと思ふ。

第一には歴史的理由である。即ち日本が國運を嗜して滿洲をロシアの手から奪つたといふことである。この感情は冷めたい理論が含む内容よりも、滿蒙を日本の特殊地域と信ずることに重大なバートをつとめてゐる。殊に現在日本の政局を擔任して居る人々は、日露戦争の頃は壯年であつて、所謂臥薪嘗膽の苦を経験した人々である。従つてこの人々が滿蒙に對し正當以上に執着して居るのは、情において同情すべきことであつて、彼等がニタ口目には、「明治天皇の御偉業により」を擔ぎ出すのは、元より故あることである。

併しながらこの事は日本人にアピールするやうに支那人及び世界列強にアピールしないであらう

ことは確實である。ロシアが帝國主義的野心を以て滿蒙に勢力を張つたことに對し感謝しなかつた支那及び列強が、それがたまく日本に移つたからとて、これに感謝する理由がないであらうことは、われ等もこれを公平に認めざるを得ない。

第二には接壤地域としての特殊地位である。これはワシントン會議の際廢棄されたところの有名な石井ランシング協定にも規定してあり、また日本が機會あれば持ち出すところのものである。現に一九二〇年對支借款團組織當時の日本政府の聲明にもかうある。

「然れども新借款團問題は他の關係國に取りては主として單純なる業務上の利害問題たるに止まるも、日本に取りては往々國家の緊切なる利害問題を包含し、その我領土に接続せる關係上國防並に國民の經濟的生存に重要緊密なる關係を有せり、然り而して如上日本の特殊地位に關しては從來關係國政府に於ても之を諒認するに躊躇せざりし所なりと雖も……」

即ち接壤地なるが故に日本が特殊の關係にありとの事實は、大體に列國に承認されたるものであるといふのである。併し支那は元よりこれを認めず、ワシントン會議において「日本に接壤地として滿洲が大切であれば、同じ理由で支那は接壤地として朝鮮の特殊地位を主張せねばならぬ」といつた意味の反駁をなし、更に最近の日本に對する回答において南北政府共左のやうに述べてゐる。

(北京政府、昭和三年五月廿五日) 日本政府は東三省に影響を及ぼす場合は、日本政府は適當かつ有効なる處置を取らざるを得ずとの一節は支那政府の承認し難いところである。即ち東三省及び京津地方は何れも支那領土主権のあるところであつて、如何なる影響があつても外人の安全は支那政府が自ら保護の責任を負ふべきである。

(南京政府、五月廿九日) 貴國覚書中、東三省の治安を維持せんがため、或は止むを得ず適當且つ有効の措置を執るべし云々とある所のこの措置は、支那の内政に干渉し、且つ明らかに國際公法上列國相互に領土主権を尊重するの原則に違背し國民政府の斷じて承認し難き所なり。

右によつて日本の特殊地位の主張に對し支那だけはこれを承認せざること明らかである。

第三に日本がその特殊地位を主張する理由は、日本の甚大なる利害が含まれてゐることである。支那自身は關東州及び滿鐵、安奉線の租借權九十九箇年延長の有効を認めず、その返還を迫つたけれども、列國にして未だこの點に關して日本の權利を否定したものはない。既に關東州及び滿鐵が完全なる日本の支配下にあるとすれば、その秩序を維持する上からも、何等かの意味の特殊地位は生れざるをえない。

第四には日本が生存するために滿蒙を必要とするといふ議論である。國が生存せんがために、他

國の領土を必要とし、それが特殊地位を形成し得る理由になりうるかどうかは元より議論の分るところである。併しながら日本の富源の少なき事、將來産業國として立つためには地勢上滿蒙を要すべき事情は、案外有力に第三者に對し、日本の特殊地位を是認せしむべき理由となつて居るやうである。

日本の滿蒙における特殊地位を主張する理由は、説いて詳かなるをえざるは遺憾であるが、大體之以上のやうであると思ふ。即ちそれは條約的であるよりも慣習的、歴史的であり、理論的であるよりも、やゝ感情的であり、またモンロー主義と同じように多分に *Self-assertion* でもある。然らばに對し米國の立場は如何。

四 日米兩國の相違

今のところ滿蒙に對する立場について大別すれば、結局日本と米國とのそれに歸しうと思ふ。英露兩國とも、そこに有する利害は決して少なしといふことは出来ないけれども、その支那に對し有する利害が多いだけに却つて明らかかなヴォイスを發することが不可能な状態に置かれてゐる。日本の主張に對し表面からチャレンヂし得るものは、米國あるのみといつてもいいと思ふ。

これを正面的立場からすれば、支那全體に對しまた滿蒙に對する政策について、日米兩國の意見の相違はないといつても差し支へない。米國の對支政策は何人も知るやうに支那の獨立及び領土保全、支那における商工業の機會均等主義、即ち門戶開放主義であるが、これについては日本は何回も列國に對して聲明して、今更この根本主義に疑ひを持ちえないまでになつてゐる。即ち日本は日英同盟協約（一九〇二年、一九〇五年、一九一一年）、日佛協約（一九〇七年）、ポーツマウス條約（一九〇五年、日露協約（一九〇七年）、高平ルート協約（一九〇八年）、石井ランシング協定（一九一七年）等において、何れもこの意味のことを聲明して居り、従つてこれに對し忠實に實行するの責任を負つて居るのである。

併しながら實際問題としては、支那に何等エキスクリユーシヴな利權を有せず、單に商業を目標とする米國と、重大なる利權を有する列國殊に日本とは、自然にその意見及び政策の相違が出て來るのを常とした。この場合米國は極めて敏感に門戶開放主義に反する如何なる國に對しても反對して來たのである。

元來、米國には二つの外交的國策がある。一つは歐洲及び兩米大陸に關するものでモンロー主義であり、他は東洋に對するもので門戶開放主義である。米國は東洋に關する限り如何なる場合でも

門戶開放主義に執着して來た。始め滿蒙に蟠居して門戶を閉鎖せんとしたロシアに反對したのは、これがためであつて、このロシアを破るために戦つた日本に、熱心なる聲援を與へたのも當然である。然るにそのロシアが敗れて日本がこれに代るに及んで、米國の支那における目標は日本になつた。日本は常に米國の注意をひかねばならなかつた。

かの一九一五年において日本が所謂二十一個條の要求を支那に提出するや、これに正面から反對した唯一の國は米國であつた。米國は五月十一日に日支兩國に通告して、兩國の間に締結する協約にして「支那における合衆國及びその市民の條約權を毀損する、支那共和國の政治的或は領土的保全を害する、乃至は支那に關する國際的政策普通門戶開放政策として知らるゝものを害ふ」といふ如何なる協約をも認むることを得ざる旨を聲明したのであつた。

この米國の門戶開放政策は、右の抗議をも一つの理由として、日本の對支要求を多少緩和せしめたのが、第一の勝利であり、その後一九二〇年新借款團組織に際して、日本をして南滿及び東部内蒙古における鐵道建設に關する借款の獨占權を、特定のものを除いて放棄せしめたのが第二の勝利であり、更にその後一九二二年のワシントン會議において九箇國條約を成立せしめ、門戶開放主義を正式に條約化、國際法化せしめたのが米國の壓倒的勝利であつた。

この幾つもの條約、聲明に縛られてゐる日本は、今や田中内閣の蠻勇を以てしても、「治安維持」の目的以外には兵を動かすことができないことになつて居る。これは注目すべきことである。

四〇

五 米國の對滿蒙觀

米國が滿蒙に對する態度を明らかにしたことは無論一にして止まらない。併しワシントン會議の際（一九二二年二月三日）極東委員會における當時の國務長官ヒューズ氏の陳述はこゝに引用する價値がある。同氏は「右地域において外國資本に依り企畫せらるることあるべき此の種性質の企業は殆んど悉く右財團に依り實行せらるゝに至るべきは疑なき事實なり」といひ、「併しながらこの事は排他的なるものに非ず、何れの國民も完全に投資の自由を有す」と述べ、

「故に予は一九一五年の條約に基きたる南滿洲及東部内蒙古における鐵道敷設に關する及び地方收入を擔保とする財政的活動に關する獨占的地位の主張を拋棄すべき旨の日本國政府の聲明は此の意味を以て解釋するの正當なることを信するものなり」

と釘を打ち、日支間の條約に「南滿洲において日本國民が商工業上及び農業を經營するため土地を商租する權利」を許與した條項があるが（一九一五年五月廿五日の條約第二、三、四條）、この條

約が効力を生じた場合には米國も最惠國條款に基いてこれが權利を得べしと述べ、最後に

「合衆國はその人民の支那に於て商工業に従事し得る一般的權利に影響ある一切の問題に付爲したるが如く本件に付ても一切の國民に對する平等主義を主張するは合衆國政府の傳統的政策たり（下略）」といつて居る。

かくして米國は一九一七年十一月二日兩國間に交換された石井ランシング協定（日本の支那、特にその近接の地における特殊利益を認めたるもの）を廢棄することに成功し、またこれに加へて滿蒙における日本の特殊地位を、結果において認めたところの日英同盟をも併せて終止せしめ、これに代へて門戶開放主義一點張りの九箇國條約及び四箇國條約を成立せしめたのである。

この日英同盟の廢棄に對して米國が如何に苦慮したかは想像の外である。かの四箇國條約にはその第四條において同法が効力を生ずると同時に、日英同盟が廢棄さるべきことを規定してゐるが、これに對して當時の上院外交委員長ロッチ氏は一九二二年三月八日上院において

「該條約の主たる且つ最も重要なるポイントは日英同盟の終熄である、これが同條約の主なる目的である。……日英同盟はわが國と極東及び大太平洋の關係において最も危險なる要素である。」

と述べてゐる。そして日英同盟を廢うた理由は種々あるが、その大なるものが、日本の滿蒙にお

ける特殊地位に関するものであることに識者の觀察は一致してゐる。 (‘Dollar Diplomacy’ By Scott Nearing. p. 62)

四三

六 不用意なる眞意

米國の滿蒙に對する態度は以上のやうな表面的な事實及び文書において明らかであるが、併しもつと明瞭に分るのは、彼等の不用意に發する言によつてある。今回田中内閣が「滿蒙の治安維持に關する聲明をなすと、二三日してからワシントン電報は直ちに米國々務長官ケロツグ氏の談話を傳へて來た。

それによるとケロツグ氏は五月十九日ワシントンの新聞會議において

「米國は日本の聲明に關して何等の相談も受けるところがなかつた。しかして米國は滿洲を以て支那の領土と認め、且つ日本が滿洲において特殊の勢力範圍を有するとの意見を承服するものでない。」との説を吐いたとのことである。(朝日新聞及びジャパン・アドバタイザーの特電等)

この説が日本において意外の反對を惹起するや續いてワシントン電報は「日本側に誤つて引用された」とて

「國務省が釋明するところによるとケロツグ氏は先週新聞記者團との非公式會談において單に米國は滿洲を以て常に支那の領土と思惟し來て居る事、及び石井ランシング協定は既に廢棄されたことを述べたが、同時に遼東半島における日本の權利と南滿洲鐵道の租借權とは米國も之を認めて居ると言明した筈だ」と辯明して居る。これ等の談話を見てケロツグ氏の意志感情が何處にあるかは明らかである。

かういふ不用意な談話は何も今回が初めてではない。一九〇八年十二月にタフト大統領は米國の駐支公使としてクレーンを擧げた。同公使は命を受け支那に出發せんとして居つたが、なほ國內に居る時に、米國の對支政策を公然發表して、南滿洲及び安奉線沿道における日本の採礦權に對し、米國は日米新協定の趣旨によつて日本に向ひ抗議するつもりであると公言した。米國政府はこの不用意な公言に驚いて赴任の途中より同氏を召喚したことがあるが、國務長官ノックスが、滿洲鐵道の中立を提案したのは、それから間もない頃のことであつた。

不用意な言葉が却つて用意された言葉より眞意を知るに便利なことがある。この二つの事件は果して何れの事を示すものであろうか。

七 米國の對滿蒙失策

四四

かくの如くして滿蒙に對する米國の態度は明瞭であるが、併し私の考へるところでは、この米國の態度は積極的でなくて、消極的である一事である。將來、米國の富と活力が外にあふれ出す場合には如何なるかは不明であるが、過去現在において、そして又近い將來においてそれが積極的になるべしとは考へられない。

かういふと論者は、かのストリート及びハリマン兩氏の活動から、ノックス國務長官の鐵道中立提唱を引用して、その然らざることを述べられるであろう。併し私の考へでは、これ等の事件は米國對支外交の脱線の事例と見るべくして、繼續的、恒久的な米國の政策の現はれと見るのは誤りだと思ふ。

この主張を裏書きする者は米國人自身にもある。最近發行されたニコラス・ルーズベルト氏の著書「The Restless Pacific」などがそれである。同氏はニュー・ヨーク・タイムスの論説記者で先頃東洋を視察して歸米した人である。同氏はノックス氏の提案を以て米國の外交史に於て稀に見る大失策だといつてゐる。(同書一二〇頁)

「米國政府によつてなされた外交的失敗にして南滿鐵道の國際化を企圖した如き大失敗はない。この計畫は日本に對する不必要なる侮辱である。それは日本の誠意と能力に對する批難である。それは又日本の日露戦争の収益を奪はんと欲したものである」

かういつて來て同氏は筆を進める。「かりにその計畫が成功したとしても、それにより米國は東洋における帝國主義者の衝突に深く巻き込まれ、米國が帝國主義のチャンピオンたるに至つたであろう。米國はこの戰術的な鐵道の中立を提議した主なる責任者として、その立場を支持し、また必要ならば、武力を以てこれを固持する道德的責任を負はねばならなかつた筈である。その内には日本との戦争が不可避となるべく、更にまた米國をロシアとの重大な繋争にも巻き込ましめたであろう」。

この論者の批評は正しいと思ふ。米國は兩米でならば、兎に角として、東洋において戦争を豫期してまでもその利權を植ゑつける意志ありとはわれ等の信する能はざるところである。殊に米國としては門戶開放主義に關する限り常にオフエンシヴな、有利な立場に立つて居られる。かれはこれを氣長く主張して居ればいゝのである。これがモンロー主義の如く米國が防禦側に立つものとは自づから異なる所以である。

八 日本は被告の立場

米國が門戶開放主義の擁護者として自から居ることは、われ等の同情を惜まないところであるけ

れども、併しながら現在米國の行動が、必要以上に自分勝手であり、また時に他國の費用において自から利せんとする傾向あることは甚だ遺憾とするところである。

元來、米國の外交は歐洲に對してこそ孤立政策であるけれども、東洋に對しては常に協調政策をとつて居る。義和團事件から關稅會議に至るまで、米國は特殊の地位を占めて居る。特にワシントン會議はその主權國である關係から、九箇國條約に關しては特別な役目をつとめてゐるのである。前述した如く支那に對する列國の政策は、今や門戶開放主義以外の何ものでもなく、此の點は米國外交の勝利といつてもよいのである。

すでに米國のリーダーシップによつ門戶開放主義の政策が確立したとすれば、米國は更に「門戶開放」後の支那と列國の關係について、相當踏み込んだ責任を負はねばならぬ筈である。即ち米國は各國が帝國主義的領土侵略的なる場合においてのみ、門戶開放主義を以て、これ等に對抗するのは當然であつたけれども、列國が「門戶開放」に歸つた以上は、これ等と協力するのはその道徳的義務である。支那と列國との關係を憂慮する事、謂ふが如く甚大ならば、門戶開放後において米國が列國と協調して、支那と列國のために計るべきことは當然でなければならぬ。

然るに事實問題としては、米國は自分勝手の時には列國を引きすつてその態度に同ぜしめるべき

ども、然らざる時は自由に行動して列國の歩調を壞すのを常として居る。南京事件の跡始末においてそうである。京奉線唐山警備について他國の諒解なくして撤退した如きも然りである。

何人にも明瞭である如く、今回の京津防備の如きは如何に解釋するも帝國主義的行動ではない。それは支那の動亂から自國民を保護する目的にすぎない。それなればこそ日、英、佛、伊その他が共同してこれに當り得るのである。元より唐山附近における米國の利害については餘りに多しとはいへないかも知れない。併しながら支那の無意味なる動亂から外國人を保護することが、結局その防備の目的であるとすれば、列強の足並みを無用にくづさないだけでも、同一の行動をとる義務がある筈である。それは米國の東洋に對するヴォイスの大なるに鑑がみて當然の義務である。

米國は自から支那に租借地のないのを誇つて居る。併しながら自己の租界を有しない米國は、その國人を他國の有する租界に住居せしめ、他國の犠牲と保護の下に安住して居るのである。この事實を顧みずして、その租界の責任者が自から守る場合にすらも、内部から異議を唱ふるに至つてはこれ普通の意味の道義にも合せざるものである。われ等は門戶開放主義のために奮闘した米國の努力を感謝すると同時に、この政策が確立したる後において、その努力を支那と列國の新關係の樹立に拂ひ荷くも他國の費用において、自己を利する如きことなきを希望せざるを得ぬ。

いづれにしても滿蒙に對する日米の見解の相違は文字の上にはない。それは解釋についてある。そしてこの場合日本の立場は防禦的被告的であり、米國のそれは原告的である。日本は米國の態度を無視することをえない。それは丁度モンロー主義を固守する米國は、その問題に關する限り防禦的であると同一立場、同じ意味においてある。(一九二八・六・二)

2 一 不戰條約調印の日

六十年目の獨逸使節のバリ入り

今日こそ不戰條約調印の日だ。さう考へてバリの市民は、沸きたつやうな感情に熱するのだつた。

バリの市民が不戰條約を殊に意義深く感じたのは、なにも佛國民だけが世界各國民に増して、平和を熱愛するからといふのではない。また必ずしも不戰條約の發案者が、フランスの外相ブリアン君だからといふのではない。否、これ等は無論、感情に強いバリ市民を刺激したものであるであらう。が、もつと重大な原因は、十年以前は正面の敵として、よし天地はその處を變へることはあつても、絶対に相握手することはあるまいとまで決心したドイツの外務大臣が、不戰條約成立を機會に堂々とバリに乗り込んで來たからである。

「ストレゼマン君萬歳！」

昨日、ドイツ外相がバリの停車場についた時に、その附近には山のやうな群衆が集つて、かう叫

んで歓迎したものだ。昨日の正敵、今は味方か。過去における兩國の血で縫うた格闘の歴史を想ひ來つて、この光景を見る時に、兩國に關係なき觀察者の眼にも涙があつた。

パリ人がかう狂喜するのも無理のないことであつた。誰も知るやうに佛國とドイツは、敵の末として生れ落ちたかと思はれるほど、お互ひに仲が悪かつた。墻一重……と云ひたいが、實はその墻すらもない隣り同志として住みながら、過去六十一ヶ年の間、ドイツの國務大臣が正式にパリを訪問したことは、一度もなかつた。従つてまたパリがドイツの正式代表を公式に歓迎したことのないことも無論である。

ドイツの代表者が最後にパリを訪問したのは、あの鐵血宰相ビスマルクが一八六七年（慶應三年）のバリの大博覽會に出席した時である。何しろビスマルクといへば、當時歐洲で鳴らせたもの、この時のパリ入りは元より堂々たるもので、それがまだ佛國の長老の間には語り草になつてゐる。それから半世紀以上を経た現在なのだ。

こゝで一寸道草を食ふが、このパリ大博覽會には日本からも使節が行つて、現に澁澤榮一子は、その時始めて洋行した一人である。一行の正使は慶喜將軍の弟にあたる民部大輔の昭武で當時十五歳の少年、これに二十五人許りの従者がついて行つた。何しろ外國の事情などは少しも知らぬ頃だ

大小をたばさんで、あの武士姿で濶歩したものだ。

各國の代表者が揃つたから、いよく觀兵式を行ふといふことになる。日本使節は戦争の實演をするんだから、こちらも武裝しなければならぬまいと、かねて用意の鎧兜で出たものだ。するとこの怪奇の姿に、騎兵の馬が驚いてナポレオン三世陛下の行列の中に駆け入り、その行列を亂して一大事を惹起したが、ナポレオン三世もその原因が日本使節の服裝にあつたと分つて、笑つて咎めなかつたといふ一つ話がある。

ドイツ國務大臣の佛國訪問はこの時が最後である。その後世界大戦の終結の時に、ドイツは代表者をヴェルサイユに送つたが、これは敗慘の國として聯合國の法廷に引き出されたといつてもいゝほどのもの、元より歓迎どころの騒ぎではない。

かういふ事情にあるところへ、今度ドイツ外相が乗り込んだのだ。兩方共無量の感慨に打たれたのは當然であつた。

(二) 由緒多き「時計の間」で正式署名の會合

ドイツ外相ストレーゼマン氏に前後してパリに入つたのは米國國務長官ケロッグ氏であつた。ケロ

ツグ氏は不戦條約の正式の提案者であり、生みの親である。世界の歴史は、永遠にこれをケロツグ條約として、將來に傳へるであらう。

ドイツ外相のバリ入りが、劇的光景であつたのに對して、米國正客の都入りは甚だ花々しくなかつた。ケロツグ氏はニューヨークを出發した時から、自から箝口令をした。大統領選挙が近づいて、それに利用されるのを嫌つた結果でもあらうし、また例のサツコ、ヴァレンチといふ二人の無政府主義者を米國裁判所が死刑に處したので、これに對する佛國同主義者の抗議の示威運動をする計畫があつたのを避けるためでもあつたらう。かれの乗つた汽車は豫定よりも一時間も早くパリについて、歡迎者や新聞記者を失望させた。

「新聞記者に會見します」

それから暫らくして米國大使館からかういふ通知があつた。世界の有力な新聞を代表する特派員が百名も大使館の庭に集つた。待つてゐるとそこへケロツグ氏が現はれて、階段の上から挨拶をした。

「諸君、私は當地に参りましたことを頗る喜びと致します。……」

ケロツグ氏の挨拶は紋切り型の短いものであつた。何か質問しようとする、姿はその儘家の中

に消えてしまつた。果然不平は新聞記者から起つた。チャール紙のブライス君はその場で、この「失敬な待遇」に抗議した。有力なエコー・ド・パリ紙の如きも「政黨の一辯護士が單なる機會から不朽の名を得て……」など、不快氣な筆を弄した。

かうした種々な場面があつて後、今日——昭和三年八月廿七日といふに、いよく各國の代表者によつて署名されることになつた。場處は佛國外務省の「時計の間」、珍らしや、それはあのヴェルサイユ條約が、署名捺印された同じ部屋であり、同じテーブルであつた。中央には不戦條約の正文があつて、たゞ名前を書き入れるだけになつて居り、その横には古いインキ壺がある。ルイ十六世大帝が造られたもので、ヴェルサイユ條約で西園寺公望公などが、日本の全權として、その名を署されたのも、このインキ壺からである。ペンは今度ハーバ市から米國國務長官ケロツグ氏に贈呈したもので、その表には“*Si vis pacem Para pacem*”と彫り込んである。

「これから開會致します」

馬蹄型のテーブルの眞中に座を占めてゐた佛國外相ブリアン氏は、その國の責任者として議長の役をつとめ、かう口を切つた。見るとこの部屋を像徴する時計の針は、今し午後三時を指してゐた。

忽ち目まぐるしい燈燭が光り出した。世界の各地から来た發聲映畫の技師は、この歴史的光景を
 映寫すべくせはしく、その機械を回轉させるのだつた。

四

(三) 主人役の佛國外相の司會振り

ブリアン氏は立つてまづ一場の演説をした。元來かれは如何なる場合でも、草稿を持たないのを
 常としてゐる。個條書き一つ持たずに、無造作に突立つて、それで數萬言を重ね、それが立派な文
 章になるのが、かれの特長である。が、そのかれも流石に今日といふ今日は、丁寧に用意した原稿
 を朗讀し始めた。

「矢張り原稿に囚はれると駄目だね。今日の先生の演説は案外精彩がないね」

新聞記者席からそんな聲も洩れるのであつた。

「世界始つてから今こそ始めて、戦争の手段に訴へないで、訴へたと同じやうに難問題を解決し得
 る方法が、各國の前におかれたのであります。各國とも過去長い間、政治的鬭争の歴史を持つて居
 ります。しかもこの大國が嚴肅に、自國の名譽を含む條約に宣誓して、國策としての戦争を廢棄す
 ることを誓ふのであります。國策としての戦争を廢棄するとは何ぞや、それは自我的な、惡意的な

戦争を廢棄するの意味なのである」

ブリアンは演説を進めた。階子段を一つ一つ踏みしめて行くやうに、かれの口調にはいつもの熱
 はなかつたが、力はあつた。

「今まで戦争は神が與へた權利かの如く信じられてゐたものであります。それは主權に附隨する特
 權かの如く信じられて來た。この「戦争は正當な事である。合理的なことである」といふ危険な思
 想が、今や法律的に不法なことに決定されたのである。それが重要なことでなくて何であらう……
 今や平和は宣言された。それは重大なことであります。併しそれを組織化する事業は尙將來に残つ
 てる。この難事業を解決するために必要なのは正義であつて力ではない。そしてこれは明らかに
 明日の仕事なのであります」

佛語の演説は英語に翻譯された。その間ブリアンは喜ばしげに立つてゐた。

列席の者は改めて今日の主人公を觀た。彼等は餘り風采のあがないブリアン氏を見ながら、こ
 の人が世界とフランスの政治に、かほどまでの感化力があるかを驚いてゐた。ブリアン氏がサンナ
 ゼールといふ片田舎の小酒屋の息子であることは知れ渡つた事實である。かれは學校らしい學校へ
 は行かなかつたが、その學校でも決して好成绩ではなかつた。田舎に居ることが嫌さに、米俵のや

四三

うな洋服を着て、あの恰好の悪い足取りをしながら花のバリに出て来たのは、青年といふにはまだ若すぎる頃であつた。

かれはバリでは下街を本據にしてゐた。地下室のカフェーや、小ぎたないレストランに陣取つては、社会主義だ、直接行動だといふやうな物騒なことばかり説いてゐた。かれこそ字義なりの放浪兒であつた。

その放浪兒が一度代議士になつてから運が向いて来た。ある日かれの議會における演説を聞いてゐた有名なクレマンソーが云つた。

「おれがネ、もしあのノートルダム寺院の塔でも盗んで、牢屋に打ち込まれることがあつたら、おれは辯護士としてあの若僧を頼むネ。なにしろあの下らないことを有難さうにいふところは天下一品だよ」

かれはその頃、放浪しながらも勉強してゐて辯護士になつてゐた。最近かれは「い、辯護士は最も悪い政治家だよ」と、ある人にあつて云つた。するとその對手が「あんたも辯護士ではありませんか」といふと「だがおれは最も下手な辯護士なんだ」と、暗に政治家としてかれの自信を現はしたことがある。

いかにもかれは政治家として佛國獨歩の觀がある。總理大臣になる事十回、平大臣になること十六回、そして現在の外務大臣として、總理大臣は代つても、かれだけは代らないのだ。

(四) 各國の使節順次に署名

ブリアンの演説がすむと、直ちに各國の代表者が署名することになつた。折角の會が皆な勝手な事を云ひ出して滅茶々々になつては困るといふ米國側の心配によつて、用意して来た大演説が無駄になつた使節もあつた。まづ立つたのはドイツ外相のストレーゼマン氏である。

「見ろ、あの苦しきうなことを」

新聞記者席からは私語が起つた。見るとストレーゼマン氏の首の邊からはグラ／＼と汗が流れてゐた。かれは久しい間、病氣だつた。「到底あの病氣では不戦條約の調印にはバリに來られまい」かれの知人も、新聞も皆なさう噂してゐた。

「行く。大事な場合だから、途中で仆れても行く」

かれは斷然云ひ放つた。そして醫者と看護婦を連れてやつて来たのである。それはあの有名なベルリン會議の時に、英國の大宰相チスレリーが、病體をしのんでベルリンに行つて、ビスマルクや

露國使節と折衝したのと似てゐる。

ストレーマン氏に見ればこれは大事な場合である。由來ドイツは偉大な外交家を出さないことをその缺點としてゐる。

「ドイツは偉大な藝術家を出した、偉大な文學者を出した。偉大な音楽家を出した、偉大な發明家も出た。偉大な政治家、偉大な軍人もあつた。が、一人の偉大な外交家を持つて居らないではないか。外交家のないことが、世界大戦に惨めに敗けた所以であるのだ」

そうある文明批評家は評した。この外交家缺乏のドイツに唯一の寶はわがストレーマン氏である。かれは中央黨をひきゐて、誰が首相にならうが、重要な外相の位置に押されて動かない。既に任を享けて外相の重任にあたる以上、世界の劃期的事件に参加して、ドイツの誠意を示さないでよからうか、かれが病ひを冒してこの會議に列席したのはこれがためである。

ドイツ外相に續いて米國國務長官クロツグ氏が立つた。前に書いたやうに、クロツグ氏はこの不戦條約の生みの親で、今日の晴れの立役者である。

「政黨の一辯護士が偶然の機會から名を不朽に傳へて……」

その朝、パリの新聞が書いた嫌味が想ひ出された。かれが辯護士出身であることは事實である。

今から七十一年以前に、かれはニューヨーク州の貧乏人の子に生れた。今偉くなつてゐる米國の成功家が多くはさうであるやうに、かれも全く自力で勞働して現在の位置を造りあげたのである。商店の小僧もやつた、新聞賣子もやつた。そして學校へも行かずに、辯護士試験の關門を突破し、政治家になつたのである。

かれが署名しようとする、その記念の萬年筆からインキが出ない。かれはそれを腹立たしげにはけしく振つた。それでも旨く書けないので、ボツリとルイ十六世のインキ壺に入れてインキを姪ませた。

クロツグ氏が席につくと、今度は英國の代表者が續いた。元來なら外相のチエンバレーン氏が來るところであるが、過勞の結果か性質の悪い病氣になつて、今、船で大洋を旅行しつゝある。その代りに來たのが、クツシエンダンその人である。

クツシエンダン卿といふのは嘗てはマクネールといつて長く外務次官を勤めた人である。(英國では華族になると名が代る、例へばアスキスがオクスフォード卿となり、スミスがノースクリップ卿となつたやうに)。この前、セネバの軍縮會議に、かれは英國の全權として參列した。その時である。かれが一時に名をあげたのは。

誰も知るやうにこの會には勞農ロシアの代表者が出席した。英國とロシアと仲の悪いのは猿と犬との比ではない。ロシアは久し振りで憎い敵と同席したのであるから、世界環視の中で手ひどく英國に赤恥をか、してやらうと思つて來た。あの雄辯なリトヴィノフが、練りにねつた原稿を以て、縦横に論じ來たり論じ去つた。

ロシアの代表者の長廣舌が終ると、丈の高い——六尺五六寸もある巨人が無造作に立つた。それはロシアの正面の敵たる英國の代表者クツシエンダン卿であつた。かれは準備もなく、このロシア側の巨砲に答へた。禮を盡した言辭を以て前後二時間餘、滔々としてロシア側の論據を粉碎し盡した。

「巨人クツシエンダン卿！。かれの前に惨めにロシアは敗北した」

そんな風な通信記事が、世界の隅から隅まで載つた。それを一轉機として今まで世間的には無名であつた外交官は、一躍して世界屈指の名外交官として持はやされることになつた。

かうして不戦條約の署名行列は續いた。日本の内田伯も立てば、カナダの代表者も捺印した、参加總國數十ヶ國、（この中には印度を始め英國自治領がある）。

(五) 不戦條約の効果とその特長

「不戦條約の調印はキリストが生れた時から以來の最大の出事だ」

（そう批評して、この不戦條約の成立を喜んだ新聞があつた。かと思ふと、

「みんな後の方に喧嘩棒を隠してゐながら、喧嘩をしないことにしようなどと、約束したつて何になる」

と白い眼をむいて馬鹿にしてゐるものもある。一體どちらがほんとなのか。

どちらもほんとなのだ。證書何枚取交はしてゐても、少しもその約束を守らうとしないものが、個人の間であるやうに、國家でもその國家が始めから、約束といふものを反古にする氣で判をつけば、條約などは幾つあつても頼みになるものではない。

殊に昔から國家と國家との間には、不思議な考へがあつた。それは個人としては嘘をいつたり、約束を間違へたりすることは非常な悪徳と心得てゐる者が、さて國家の間の事になると、嘘を巧に云ふこと、相手の不意に乗じて、高價な財物や土地を攫拂ふことを外交の要諦と心得てゐる者が多いことである。

ルイ十一世が毎日髻を削らせる髮床があつた。この親父が職掌柄、頗る口がうまい。殊に客を胡麻化したり、下らない話しを大袈裟に吹聴したりすることが、實に手に入つたものであつた。

「こんな男を外交官にして對手の國を胡麻化したらい、ぞ」

ルイ十一世陛下はジャリ／＼髻を削られながら、かう考へついた。そこで國王は早速この髮床の主人オリヴィエ・ルダームを外交官に抜擢して思ひ切り巧妙に嘘をつかせたことがある。

かういふ風に始めから對手を欺す氣なら不戦條約などは何にもなるものではない。これでは他の國を油断させて、その隙に乗じて、他國の領土でもとる智慧ぐらゐるか出はすまい。併し喧嘩すれば結局兩方損で、これは如何しても避けねばならぬと信ずるものにとつてはこれぐらゐる結構な條約はない。

いづれにしても、今までは戦争といふものは公然やつていゝものであつた。それがこの條約によつて戦争は不正不義なものとなつたのである。如何なる場合でも戦争には訴へない。まづ平和手段を以て解決する。それを「人民の名において」宣誓する。これがこの條約の骨子なのだ。

最後にこの條約の原文たる「人民の名において」が、日本の政界に問題になつてゐるから試みに長い原文からこの一項だけを紹介しておいてみる。

Artículo I

The high contracting parties solemnly declare in the names of their respective peoples that they condemn recourse to war for the solution of international controversies, and renounce it as instrument of national policy in their relation with one another.

不戦條約の本文は三ヶ條からなつてゐてこれはたゞ一個條だけだ。この「人民の名において」の文字が問題になつたばかりに、却つて日本では一般の人々に記憶されて來たのは世の中は何が幸ひになるか分つたものでない。(昭三・一〇・二〇)

3—ムツソリニを排す

(一) ムツソリニに対する観點

ムツソリニ對して、その人が如何なる態度を持するかは、たゞ一つの問題を知らば充分である。それはその人が「自由」に對して、如何なる考を有するかの一事だ。

ムツソリニ治下のイタリーが、かりに總べての點において以前より優つて居るとしても明白に缺けてゐるものが、少くとも一つはある。それは個人の自由である。現下のイタリーにおいて、個人の自由が如何にむごたしく踏みにぢられてゐるかは、少くも外國の事情を知るものなら誰れでも知つてゐる。そこには反對黨は存在し得ない。そこには當局者に對する批評はない。あるものはムツソリニ禮讃の聲のみである。この法則を破つたものは誰彼れの區別なく放逐、或は慘殺される。ニッチ、アメンドラ、フォルニ、ミスク、マテオッチ、サルヴェミニ、スツルゾその他の名士の例がそれである。

もしこゝに人があつて、昔のバトリック・ヘンリーが叫んだように、「自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」といふほど自由に執着し、個人の自由を以て何者にも代ふることの出来ない尊貴なものとするならば、かれはこれに缺けてゐるイタリーの現狀を不満なりとし、明らかにムツソリニ對して攻撃の矢を放つであらう。何故ならば始めに書いたように、イタリーには何が澤山あつても、少くとも個人の自由だけは全く品切れの態だからである。

これに反し、もしこゝに人があつて、個人の自由など、いふものは、墮落書生の寢言にすぎず政治の要諦は結局力であり壓迫であるといふものがあらば、かれは直ちにムツソリニに共鳴し得るであらう。何故ならムツソリニは力の化身といつてもいい、ほどの彈壓主義者であり、國家の名において、如何なることをも敢行するに躊躇しないからである。そしてムツソリニの治績は目前の事實を以てすれば、確かに以前よりもいゝからである。

(二) かれの議會政治輕視

確か昨年正月だと思ふが、時事新報が「貴下の最も尊敬する人は誰か」と、各方面の名士に質問を發したことがあつた。これに對して最も多い名はムツソリニであつた。それは壓倒的な多數を

占めてゐた。「成程わが國の多數の人のテンペラメントと傾向からいへば、ムツソリニが尊敬されよう」。私は當時こう思つたことだつた。

けれども當時、私が不思議に思つたのは、このムツソリニを尊敬し、崇拜する人々が、同時に憲法政治の保持者なりと自稱して居たことである。誰れも知るやうにムツソリニは憲法政治——多數政治を極端に排斥し、嘲笑して居る。かれは嘗てロンドンのデーリー・テレグラフの記者と會見した時に、かういつた——

「議會？ 必要の時に俺は召集する。不必要な長談議をして、何も分らぬ連中がベチャ／＼喋べる機關などは俺には不必要だ。もし俺が何かの問題について知りたいことがあれば、俺は新聞を読むよ。そこには専門家や教授の説や主張があつて、議會の演説などより數倍有益だ」

かう語つたのは大正十二年末だが其の後かれは選挙法を改正して、議會を全く名ばかりのものとし、かれの自由意志でどうにでもなるものとしてしまつた。即ちイタリーに關する限り、名前は存在すれども、實際の憲法政治といふものは、實在しないといつて過言ではないのである。

かうして議會を骨抜にしたかれは、それだけでは承知しない。かれはその無勢力の議會で自己を攻撃することを許さない。さきにマツテオチといふ議員は、かれの政策に對して批難を加へたが、

この人はその日議會からの歸途暴漢のために襲はれて殺害された。またムツソリニの秘書をしてゐたロツシの自白するところによれば、かれの政敵アメンダが何者かに襲撃され、これが原因で死んだのは、ムツソリニ自身の命令に出たものだとのことである。

ムツソリニを是認する人は、議會政治を否認する人でなければならぬ。鈴木内相が、どんなに選舉に干渉しようが、議會で何れだけ對手を壓迫しやうが、「善政」を敷くためには、すべてこれ等を承認するほどの人でなければムツソリニ禮讃の論理のつちつまがあはない。口に議會政治を説きながら、ファシズムを讚美するほど分らない話はない。

(三) ファシズムは必要の産物

社會の現象は、生るべき必要と原因があつて生れるのである。イタリーのファシズムも元より必要の産物である。

大戦後のイタリーはロシア革命の影響を受けて、一時非常に混亂した。ストライキの續出は無論として、労働者の工場管理とか、銀行をかれ等の手に納めるとか、一般國民は赤露の革命を再びイタリーで見るべきを想像して安き心もなかつた。この時に現はれたのが、ムツソリニを頭目とする

フアスシストの一團である。かれは力を以てイタリアの實權を握ろうとした左翼團に對して、力を以てこれに對した。左翼團の混亂に飽きた國民の同情は確かにフアスシストにあつた。フアスシストは國民の喝采裡に權力の中心に座した。

こゝまではかれの出現は極めて自然である。國家の機關が赤色恐怖のために運轉出來なくなつた時に、この混亂を既倒に返して、そこに秩序と靜平を持ち來たすことは元より國民の感謝を買ふに充分である。もしムツソリニが教養あり、かつ性格的にカプールの流れを吸んで居る偉大な人物であれば、かれはこゝに止つて議會の權利と憲法の運用を完全にするために努力すべき筈であつた。併しムツソリニには、そうした理想と修養はない、かれは目の前に來た權力をこぼみ得なかつた。かれはナポレオンがそうであつたように、自から獨裁者の位置に座した。

この事はかれの過去を見れば少しも不思議はない。かれは若い時から常に極端なる理論の所有者であつて常に直接行動を主張した。戦争の始め頃、かれは激烈な中立——戦争不参加論者であつたが暫くして同じ程度の熱心な參戰論者となつた。一九一四年にかれは「赤色週間」に参加して共產主義的な無産階級の革命運動を試みた。

かれは社會主義者であつたが、他の同主義者が何等の行動をしいのを見て、何時でもこれを攻撃

し、自から共產主義者であり、革命主義者であると高言した。かれはローマに進むに當りてや、

「予は革命ならば如何なる革命でも加擔する」とまでいつたのである。かれが當時ボルシェビキに對して深甚なる同情と同感を有したのは明らかな事實である。即ちこれをニツチの言を以ていへば「かれは法律に對して最少の尊敬と雖も有さなかつた。法律は弱者のためである。暴力のみが社會的關係の基礎である。——それが赤色暴力乃至は白色暴力何れであつても、かれにはいゝのである。」

かうした信念と性格を持つかれが鐵血的、挑戰的獨裁者になつたのは當然である。かれは社會主義を信じても國家主義を信じても、その一貫した根底は直接行動である。元來議會政治といふものは教育と、手續き、投票といふような、廻りくどい方法をとつて後行はるゝものである。直接行動主義は、結果を目掛けて直ちに近道を切る主義である。ムツソリニはこの近道主義である、かれを崇拜するものも同じこの主義である。

(四) ムツソリニとレニン

「あのムツソリニの役者のやうな顔を見ろ、あの智慧と思想に缺けて、しかも空虚なる挑戰そのも

のを表現する目を見ろ。それは何者かにおびえる顔である。おびえるといふのは暗い影から出る暗殺に驚くといふ意味ではない。それは白晝公々然として濶歩する眞理に對する恐怖である。かれに對する小さい惡聲に對してさへも戦く恐怖である。かれはかれの批評家の前に自己を顧みることが出来ないほど恐怖に満ちてゐる。そしてかれの過去の記録の上に鮮血のやうに滴つてゐる批評と反對に堪へずして、この人々を殺し、虐待するのはその恐怖から来る當然の結論である……」

エツチ・ジー・ウエルスは、ムツソリニをかういつて批評した。自由主義のチャンピオンたるウエルスがその反對の思想の上に立つ者を嫌ひ弾劾するのは無理のない事である。

けれどもこれが只ウエルスの口から出た言葉だと思へば間違ふ。イタリーでもかれの獨裁政治に對する反對が、漸次動いて來て居るのである。英國下院議員ケンウオーシーの發表したものの、中にこんなことがある——。

「あるイタリーの金満家が近頃私にかういつた、「フラスシストは謂はば消防夫ですよ、家が火事になつた時には消防夫は是非必要で家の中に呼び込みますが、火事が消えて仕舞つた後まで、永遠に家の中に居て貰はうとは思ひませんよ」と」

イタリー人が個々にフラスシスト政府について、どう思はうがそれは急に仕れるものでも、代へ

られるものでもない。ムツソリニの背後には強力なる武装した團體がある。五人團結すれば、團結なき五十名の群衆の中を縦横に切りまくることが出来るやうに、このムツソリニ政府の鐵腕政策はムツソリニに異變なき限り、餘程の將來まで續くであらう。腕力を背後に有する限り、随分無理な滑稽な習慣や理屈が民衆に強いられ得ることは、何もイタリーだけの現象ではないからである。

ムツソリニ政府が永存するにしても、しないにしても、たゞわれ等が記憶しなければならぬことは、ムツソリニ政府は、その根本の存在理由と運用において、所謂フレイム・オヴ・マインドにおいて、ソヴェイェット政府、レニン政府と同じであることである。その主張は無論異なるけれども多數者の意志を以て大衆の上に押しかぶせようとする態度、直接行動を以て権力を奪はうとする態度——反對者の存在を許さざらんとする態度——これ等は符節を合するやうにこの二つが同じではないか。

あるひはムツソリニとレニン乃至はスターリンとはその主義において天地の相違があるのをいふ者があるかも知れない。如何にもその點に相違はある。併し自己の信ずる方法が絶對的に正なりと信じ、そしてこの方法を如何なる方法によつても一般民衆に強いることが、彼等の幸福を増すことであり、利益であると信ずることは即ち一である。ムツソリニとレニンとは直接行動主義の幹に咲

いた黒と赤との二つの花である。その花の色は異ふけれども、根幹は同じであるのはこの春の他の場處で論じた如くである。現に強烈なる社會主義者であつたムツソリニが、手の裏をかへすやうに同じ程度の熱心なる國家主義になつた事實を見給へ。

ムツソリニを崇拜する人々は、又同時にレンインやトロツキーを尊敬する人々でなければならぬ——少くともそのとつた方法について同感を表するものでなければ論理は一貫しない。

(五) 結局同じ右翼と左翼

私の、こうして書いてゐる机の前には數種のムツソリニに関する書籍がある。その内二つの洋書が特に目立つ。いづれもイタリーの總理大臣をつとめた人々で、一人は有名なニツチの *Bolshevism, Fascism and Democracy* であり、他はボノミの "From Socialism to Fascism" である。

後者のボノミはムツソリニが天下をとる最後の總理大臣であつた。かれは若い時から社會主義者を以て聞えてゐたが、革命に反對して改良主義を主張してゐた。一九一二年のことであつたがイタリー皇帝は無政府主義者のために狙撃されたことがあつたが、當時代議士であつたかれは、奇禍にあはれたイタリー皇帝をお見舞ひ申あげたのであつた。

これが果然問題になつた。皇帝をお見舞申しあぐる如きは、社會主義者として甚だ不埒だといふのである。社會黨はついにかれを除名した。この時、ボノミ除名を發議し、奮闘したのが今のムツソリニ君であつたのである。國家主義を高唱する現在のかれとは如何に大きな相違あることか！併し驚いてはいけぬ。時計の振り子は、右と左では随分離れて居るようだが、圓の反對の側の距離は、極めて僅かの相違にすぎない。ムツソリニはこの近道を切つたのだ。日本でも社會主義者で直ちに國家主義になつたものの例も近いところになくはないか。

國民は直接行動が許さる、習慣がつけば、前に書いたように、議會政治などといふ迂遠な道はとらない。何かの機會において「力」を以て實權を握らうとするのである。昔から革命がある國は、必ずそれまで議會政治を尊重せず、一つの階級が、他の階級を押へつけておいた國に決つてゐる。白い革命があつた後に赤い革命がある。赤い革命の後に白い革命が続くのである。それは歴史を引用するまでもない。

私は革命否認論者である。革命が社會の進化を助けるといふ論理を信じないものである。痛快は即ち痛快であるけれども、それによる破壊と損失が、到底それを償ひえず、従つてその勃發を許し得ずと信ずるものである。

革命、直接行動を否認する私は、前に述べたような理由でソヴェート主義を否認し、また同じ理由でムツソリニ主義を否認する。私は日本の行く道は頗る廻り遠くはあるけれども、教育と漸進による議會政治以外にはないと信ずるからである。現在の議會政治は随分困つたものだと思つてゐるけれども、併しこれを輕視し、無視するよりも、これを改善し進歩せしめることに力を盡したいと心得てゐる。

私は最後にムツソリニ禮讀者に聞く。……あなたはムツソリニを崇拜する、これはムツソリニの獨裁が、やゝあなたの平常信ずる理想に近いからだ。併し反對にあなたの全然反對する傾向を有する獨裁者が現はれたら、これに對しても讚美するか。そして獨裁者といふ以上は、そこに現はれるものが、常にあなたと主義政策を同じうするものだといふことが、どうして保證できるか」と。

(一九二七・一〇・四)

4 — 選挙から見た米國

一、スミス敗北の意味

フォードの自動車を、人間にしたやうなのがフーヴァーである。能率的で、機能的で、うま味はないが安全で、華々しくはないが経済的で、地味ではあるが危な氣がなくて——それがかれの身上である。そのかれが今度選ばれて、米國の大統領となつた。

この大統領選挙が行はれた日——それは偶然にも御即位禮のために鳳駕が京都に向はせられた十一月六日であつた——の翌日の都下の新聞は、一齊にフーヴァーが壓倒的多數を以て、無人の野を行くやうに、米國を始んど席捲し盡したことを傳へた。いかにも米國四十八州の内、フーヴァーが四十州までを獲得したのであるから、フーヴァーにとつては大勝、スミスにとつては大敗であることは無論である。殊に政戦の間、前後まで兩者共勝利をクレームして居り、また所謂立人筋の豫想を反映する賭の如きも、一九二〇年の選挙にはハーディング(共和黨)一對コックス(民主黨)十、

一九二四年にはクーリッジ（共和党）一対デウィス（民主党）十五、といふ数字を示してゐたのに今回は前日まで一対三の比例を以て進み、一部には一対二半で賣買されたところもあつたほどクローズ・ゲームを豫想されて居つたにしては、餘りに飽氣ない勝負といはねばならぬ。

元來、民主党には何としても動かない地盤が少なくとも十州ある。從來かつて他黨に走つた経験のない土地であつて、稱して「堅固な南部」(Solid South)といふのがそれである。

試みにこれを列記すると

アラバマ（一一）アーカンサス（九）フロリダ（六）ジョージア（一四）ルイジアナ（一〇）ミシシッピ（一〇）ノース・カロライナ（一一）サウス・カロライナ（九）テキサス（二〇）ウァーシニア（一一）

の十州であつて、選挙員投票百十四票あり、これ等の州は民主党が假りに案山子を擁立しても、從いて來ると極言してもいゝほどの固い地盤である。即ちスミスが如何に不成績であつても、この南部十州だけは、その得票に歸すべく、残る問題はかれが他の州に何れだけ食ひ込めるか、興味のかゝるところであつた。

然るに開票の結果は意外にも、スミスは單に八州八十七票を得たに止まり、残る四十州百四十四

票は擧げてフーヴァーの蹂躪に委したのである。北部にマサチューセツツ州とローズアイランド州を得たことは、彼の手柄であつたけれども、右南部十州の内、フロリダ、ヴァージニア、テキサス、ノース・カロライナ州を敵に與へ、その上に隣接州たるテネツシー、オクラホマ、ケンタツキー等をも併せて敵のために割いたのは如何様大敗たるを免がれない。かれが選挙の結果判明後、直ちに聲明書を發して四分の一世紀二十五ヶ年の公生活が終りを告げ、將來再び公職を争はざることゝ發したしたのは、民主黨傳來のソリッド・サウスも破壊せしめたことに對し責任を感じたのも、その重要なる理由の一であらう。

然らばかれの敗因は何れにあるか。そしてこれは何を示すか。私の觀る所によれば、近來の米國に起つた事件にして、このくらゐ暗示と教訓に富んだものはないと思ふ。

二、米國選挙制度の不合理

議論を進める前に一應注意してをかなければならないことは、スミスが今回の選挙に大敗したことは事實であるけれども、併し日本の新聞が傳へたほどの大敗ではないことである。大體の計算によれば、フーヴァーが二千二百萬票を得たのに對し、スミスは一千六百萬票を獲得したと電報は傳

へて来てゐる。
これを過去の例に見るに、民主党の大統領候補者にして一千万票を越へたる得票を有したものは全くなかつたのである。ウィルソンが得意の絶頂にあつた一九一六年においても、その得票は九百十三萬票に過ぎず、前回デヴィスの如きは八百四十萬票に過ぎなかつた。これを數字に示すと左のやうになる。

年次	候補者	一般投票数	選挙委員数
一九一二年	タフト(共)	三、四八三、九二二	八
	ウィルソン(民)	六、二八六、二二四	四三五
	ルーズベルト(進)	四、一二六、〇二〇	八八
一九一六年	ヒューズ(共)	八、五三八、二二一	二五四
	ウィルソン(民)	九、一二九、六〇六	二七七
一九二〇年	ハーゲン(共)	一六、一五二、二〇〇	四〇四
	コックス(民)	九、一四七、三五三	一二七
一九二四年	クリッパ(共)	一五、七二五、〇一六	三七八

以上の數字でも分るやうに實際の投票数と選挙人の数とは必ずしも一致しないのである。これは各州がその選挙人を選ぶので、全米的の一般投票数とは相互関係がないからであつて、一般投票が多いに拘はらず落選した例が少くない。

例へば一八七六年にティルデン(民)は四百三十萬票を得、ヘイス(共)は四百〇三萬票しか得なかつたに拘はらず、選挙員数が一票の差で後者に敗れたことがあり、また一八八八年にクリーヴランド(民)は、ハリソン(共)より約十萬票の多數を獲得したに拘はらず、二三三票對一六八票で敗れた例がある。即ち米國の二重選挙法によれば、ある候補者が一千七百萬票を得、これに對して他の候補者は八百萬票しか得なくても、後者の方が當選し得る場合があり得るのである。かうした不合理なことが一部において、直接選挙法に改正すべきを主張する所以なのである。

この事實を胸におけば、フリーヴァーの總投票の四分の三を得たるスミスが、何故に選挙人数にお

いて四四四對八七、即ち五分の一にも當らない數を得るに止まつたかを知ることが出来るであらう。

前述したようにスミスが大敗したのは抗論の餘地はない。特に過去三回も知事として人望を博したニューヨーク州をも敵に譲つたに至つては、何としても不覺の至りであつた。併しながら「大敗」の内容を検するに當り、その一般投票が民主黨として空前の大多數であり、從來ならば優に當選して居つたであらう事實に顧みて、今回の政戦においてはスミスが弱いのでなくて、フーズアーが強かつたと稱して可なるべく、この點聊さか奸箇の戰士の最後を慰むるものであらう。

もしそれニューヨーク州がその寵兒スミスを拒絶したのは日本人にとつては珍らしいことである。この前の大統領選挙にはウエスト・ヴァージニア州がその州出身たるデヴィスを拒絶し、更にその前の選挙にはコックスは同じく自州において敗れてゐる。床次氏一人出れば、全縣是非の區別なくこれに従ふ愛郷心と對比して、そこに多少の相違を見出すことが出来よう。

三、軍資に在いて兩黨伯仲

今回、民主黨が敗れた原因は從來のそれと同一でない點は注目を要する。

從來民主黨の最大難關は選挙費用のない點であつた。過去五十七ヶ年に政権にありついたのは單にクリーヴランド、ウィルソン二大統領の十六ヶ年だけである同黨は、金權に縁の薄いのは當然であつた。この選挙費の少ないことが、常に同黨の選挙運動上に大なるハンデキャップをなしてゐた。

米國においては投票を買収することの不可能なのは勿論だが、併し過去において所謂軍備が豊富なことが勝因をなしたのは疑へない事實である。これについては本年米國社會黨がブルジョア黨の選挙亂費振りとして發表した中に左の數字がある。

年次	候補者	選挙費
一八六〇	リンカーン(共)	一〇〇,〇〇〇弗
	ダブラス(民)	五〇,〇〇〇
一六六八	グラント(共)	一五〇,〇〇〇
	シーモア(民)	七五,〇〇〇
一八八〇	ガーフィールド(共)	一,一〇〇,〇〇〇
	ハンコック(民)	三五五,〇〇〇

一八八四	ブレイン(共)	一、三〇〇、〇〇〇
	クリーヴランド(民)	一、四〇〇、〇〇〇
一八九六	マッキンレー(共)	三、五〇〇、〇〇〇
	ブライアン(民)	六五〇、〇〇〇
一九二〇	ハーディング(共)	四、〇二二、九〇二
	コックス(民)	一、五九〇、六三八

以上は唯大勢を示すに過ぎないが、過去の例は悉く(唯一の例外は大戦中のウイルソンだけ)資金の豊富な候補者が當選してゐる。そしてこの點が最も民主黨の苦心したところであつた。

然るに今回はスミスはその個人的友人中に富豪を有する外、一部の反對を排してジェネラル・モーターズ会社の重役筆頭ラスコプを拉し來つた關係から、選挙中の軍資に事欠かず、共和黨と共に四百萬ドル以上の寄附を集め得たのである。かくしてかれは自由に遊説も出來、ラヂオのために五十萬ドル以上を使用し得たのであつた。

特に數字に執着したがるものには今回の選挙も、軍費の多寡による勝敗だといふことは出來よう。なぜなら奇附金は依然として共和黨の方が多いからである。併しながら公平なる論者は、この

點において平等點に立つて居つたと見るであらうと思ふ。

この陣容を背景にして兩者の戦術は異なつてゐた。フーヴァーは絶えず受身であつた。過去七ヶ年半、商務長官の要職にあつた關係から、かれはこれ以上に出るべき方法はなかつた。「共和黨政府の施設を見よ、世界に絶する繁榮を見よ、」それがかれの唯一の立場であつた。幸にこの立場をとるにはかれは無二の辯り役であつた。かれは「商務長官兼各省次官」といはれたほどの現政府の中心であり、現在の米國の繁榮が何人に對するよりも、かれに負ふところあるを國民は諒解してゐた。

殊にかれは無類の訥辯であるが、この防禦的立場に立つ場合には却つて手固く見えた。演説場において起る拍手の数は少なくとも、科擧者として口堅いところが頼もしく感ぜられた。これはかれ程有名なもののみ與へられる特權で、もしかかれが無名の人であつたら、惨めな敗をとつたであらことは想像に難くない。たゞラヂオがかれを助けて、演説でもそれほど醜くなかつたのは勿怪の幸ひであつた。

このフーヴァーに對してスミスは徹頭徹尾攻勢的であつた。その討論力、その雄辯、その反駁力、その人を魅する力は、リンカーン以來、未だ嘗て見ざるものであつたとは、何人も承認するところである。かれの到るところ嵐のやうな人氣は湧いた。かれの辯舌に對する喝采は、かれをして

時々立往生せしめたほど盛んなものであつた。フーヴァーの弱味は、農業家とドイツ系米人の間にあつたが、スミスはこの人々を目がけて大膽に叫びかけた。

その人氣あるスミスは敗れたのである、たゞ兩黨共満足すべきは、今度ほどカ一杯闘つたことはない一事である。

四、「繁榮」を重點の政戦

フーヴァーが勝つた最も大なる原因は、その重點を米國の繁榮にをき、國民に對し繰り返しの點を極説したことにあると思ふ。

誰も知るやうに米國の繁榮は古今に絶してゐる。その例はこゝに引照するまでもないが、例へばソヴィエット・ロシアのスターリンの政策が完全に實現するとして、一九三一年にロシアが需要する石炭の量は、一九二六年度におけるドイツ需要量の七分の一であり、一九二三年度における米國の十七分の一だといふやうな數字が、これを示して居るであらう。

米國人は新聞雜誌によつてかうしたことを屢々聞かされて、米國の繁榮に關しては心から満足してゐる。そしてこの繁榮を失ふまいといふ氣分が第一に動いてゐることは當然である。故にスミス

と雖も、この繁榮第一主義を忘却し得ない。かれが選舉委員長として「百萬長者製作者」といはれたラスコブを引きぬいたのも、資本家の安心と國民のこの邊の期待に添ふ意志あるを示したものに外ならなかつた。

そればかりではない、元來共和黨は關稅保護主義なのに對し、民主黨は、國稅低下主義（自由貿易主義とは大分隔たりがある）である。然るにスミスの進歩主義を以てしても、關稅の大改正を約束せず、當選後専門委員を任命して研究することを聲明したに過ぎないのである。かつ民主黨本部はアーヴィング・ベルソンをしてジャズを作曲せしめ

"We'll have good times with Hoover' but better times with Al"

など、民衆を唱はしめたによつても、如何にこの點に力を入れたかを知るを得よう。

併しながら「繁榮」の競争ではフーヴァーが何といつても本家本元である。スミスは米國の現在において四百萬近い失業者があり、「繁榮」は一部の資本家のみの事實であることを説いたけれども、一般民衆は至極現在の状態に満足してゐるのだから、その反響は少なからざるを得ない。殊にスミスを助くる資本家はその友人に限らるるに對し、フーヴァーはラモント、フォード、エヂソン等全國に及び、大勢はこの點で不利であつた。

五、自由主義者の無力

現在の境遇に満足するものは勢ひ保守にならざるを得ない。今回の政戦で明かにされた事實は經濟的に極端なほど進取的である米國民が、政治的には如何に保守的であるかといふ一事である。フーヴァーとスミスの政戦は始めは個人性と地盤の戦ひであつた。然るに目を経るに従つて、それは保守主義と進歩主義の争ひとなつた。最初の間は、既成政黨の泥試合ぐらゐにしか論じてゐなかつた進歩主義を代表するネーション、ニュー・レパブリックの如き雜誌も、スミスの政見を聞くに及んで力を入れ出した。共和黨の進歩派を代表する上院議員ノリスが、いよく積極的にスミスを援助すると云ひ出したのは、選挙一週間ぐらゐの前である。

即ち今回の政戦においては第三黨が出現しなかつた代りに、この前ラフォレットに屬した進歩派は擧つてスミスに行つた。そしてこの點に望みが囁せられてゐた。しかも開票の結果文化の盛んな都會においては（禁酒緩和問題も原因して）スミスが勝つたに拘はらず、地方及び農民の投票によつてかれは敗れたのである。

この外、スミスが敗れた原因は宗教問題が最も大であつたのは申すまでもない。ダーウインの進

化論の教授を法律を以て禁止してゐる州の少なくない米國は、宗教問題については滑稽なほどブリミチヴである。かれがカソリック教徒であるといふ一事は、政敵フーヴァーも、これを問題にすることを厭に戒めたに拘はらず、最も大なる問題となつてゐた。カソリック教徒の多いマサチューセツツ州（固い共和黨の地盤）で勝ち、クー・クラックス・クランの本元たるオクラホマ州、テネッシー州、テキサス州等で敗れたのは、この問題を外にして考ふることは困難である。

六、二大政黨の分解作用

然らば米國の政界、殊に共和黨と民主黨は如何なる道をとるであらうか。これが最も重要な問題である。

この場合、一應注意してをきたいのは、米國において問題になるのは政黨であつて、個人ではないことである。これが英國、佛國、日本等であれば、政黨が問題になるやうに個人が問題になるのである。ロイドジョージはどうするか、ボアンカレーが如何動くか、また床次竹二郎はどう出るかといふやうな問題は政局全般に影響があるけれども、米國においては、人物については人氣の中心はあつても、リーダーシップの中心はないといつていゝ。自己の聲名だけに頼つては、ルーズベル

トの偉を以てしても敗れ、ウイルソン、ラフォレット悉く物にならなかつた、日本では前總理大臣は長老として有力な發言權があるが、米國では大統領なり、その候補者なりはその時だけのものなのである。

前大統領タフトも、昭和四年の三月六日からなるであらう「前」大統領クーリッジも、政界には全く無力である。これは米國においてはオルガニゼーションが發達して、政治家はこの上に踊る役者にすぎず、佛國のやうに人物がこれを率ふるのではないからである。

そこでこの選舉を轉機として二大政黨がどうなるかの問題である。これについて直ちに氣がつくことは、民主黨は最早中央の大政黨としては存在の價値がなくなつたことである。それは地方政黨としては残るであらう、併し自派から大統領を擁立する大政黨としては、嘗て共和黨内でタフトとルーズベルトが内紛して分離したような事件が起らない限り到底同格を以て政敵と争ふことは困難である。今回死力を盡して共和黨と争つた結果が、あの失敗に終つた事實がこれを證明してゐる。即ち二大政黨の對立は、米國においては今回の政戦を機會として滅し去つたといつて過言ではないのである。

然らばこの二大政黨政治の崩壊が米國政界にとつて不幸かといふと必ならずしもそうではない。

誰も知るやうに米國の二大政黨の政綱の間には大した區別はないのである。今年の七月にアイオワ大學に米國の有名なる政治學者が集つて、共和、民立兩黨の政綱を比較研究したが、その研究された二十二の問題の内、明白に異なるのはたゞ二つだけである。一つはニカラガに對する内政干渉問題と、他は勞働争議の中止命令に關する態度が、兩黨の異なつてゐる點で、他は禁酒問題といふも關稅問題といふも、同じ事を異なつた態度で述べたにすぎないと云つてゐる。

かうして二大政黨に區別はないが、併しその各政黨内を見れば、地域と利害によつて相結んで居るのである。農民區域より出た議員、代表者は兩黨を通じてプロックを形成し、例へばマクナリー・ホーゲン法案の如き農民救濟法については兩黨の者が結束して行動を共にするのである。また兩黨内に反カソリック團があつて、ドイツのカソリック黨と比較することが出来る。禁酒團、反禁酒團、急進派、保守派、かうしたプロックは一つの政黨内に止まらずして、兩黨を貫いて結んでゐるのである。

即ちハーヴァード大學のムンロー教授の言によると「政治問題は二政黨を、垂直的に離してゐない。それ等は經濟的利益、地理的不利益により、平面的兩政黨を打破つて、プロックの利用に委せて居るのが現状である」のである。そして二大政黨はその政治的機關をたゞこのプロックの利用

に委せて居るのが現在の状態なのである。

今回の政戦において民主黨が近い將來に復活する望みを失なひ、共和黨獨占の世界が現出した以上、このプロックによる政界の分解作用は急速度を以て進展するであらう。實際また過去において、米國議會が小黨分立の觀を呈して居つたのは、米國政界を注目するものが見落さなかつた現象であつたと思ふ。

七、新内閣の政策如何

私に與へられたスペースは最早なくなつた。たゞフーヴァーが大統領に當選して、如何なる政策に出づるかを簡單にでも書いてをかなければ、讀者に忠實だとはいへまい。

第一に、日本にとつて最も關係あることは、米國の關稅を如何するかの問題である。これについてはフーヴァーは前述の如くに關稅保護主義であり、また共和黨の政綱もこれを明言してゐる。これの十月六日のテンネッシー州における演説はこれを明らかにしてゐる。

現在の米國關稅は一九二二年の制定にかゝるものであるが、フーヴァー内閣においては、更に關稅を、騰げるであらうことは明らかである。但し日本に關する限り生糸の如き原料に對する課稅

は想像されず、大した影響ありとは思はれぬ。フーヴァーは關稅によつて得た收入だけを減稅に差しむくるであらう。

第二に日本の關心を有することはその外交政策である。フーヴァーの外交政策はクリーリツチ内閣のニカガラ干渉政策をさへ、是認してゐることだから、大して變化があるとは思へない。併し國務長官に何人が任命されるかがその政策の分れるところである。

傳へられるやうに上院議員ボラーが任命されたとすれば、ロシア承認、支那國民運動に對する同情といふやうな政策に動くであらう。ボラーは一九一八年頃にはフーヴァーを口を極めて攻撃したに拘はらず、今回はフーヴァー成效の第一位の功勞者であつた。従つて國務長官説も根據があらうが、フーヴァーがその對外政策を急進的のボラーに託するを希望するかは疑問である。(果然スチムソン氏がその後任命された)。

もしそれが國の一部新聞にはかれが移民の家族呼び寄せに對し寛量であるべきを述べたことを以て、日本移民の解決が近づいたと論じたものがあつたが、これは事實を知らないものであつて、日本移民は即ち與からないことを覺悟せねばならぬ。たゞ明らかかなことはフーヴァーの當選によつて諸種の株が暴騰した事實が示すやうに、米國の繁榮はかれの大統領就任によつて益々順調になる

であらう一事は疑へない。これが又米国民がかれを選んだ理由でもある。

最後に一言したのは、スミス、フーヴァー共、今回の政戦においてその政敵により、過去の経歴及び行爲を残すところなく調査詮索された。もし彼等に一點の怪しきところあれば、かれ等は即座に國民の信を失し、永久に公民生活より排斥されたのであらうことは明らかである。しかも兩者とも生涯を通じ、公私共一點の曇りもないのである。われ等は米國における總べての欠點を差引いても、政治家の公明正大と、これを監視する國民の力に對し羨望の情を有さざるを得ないものである。(三、一一、九)

(注意) 以上は大統領選挙の結果が電報によつて判明した翌日、『經濟往來』の依頼によつて書いたものである。附記したいことはあるが、大體において譯つて居らないと思ふから、そのまゝこゝに轉載することにした。

5 — 東京と大阪の相違

東京は消費地であつて、大阪は生産地である。日本における二つの大都市は、いつの間にか、かう相場が決つてしまつた。

大阪が日本の産業の中心であることは、東京人がどう地國太を踏んでも仕方のない事實だと思ふ尤も日本の産業が、どれだけ深い根を張つて居るかといふ點は、無論問題になりうることである。近頃は何を讀んでも何を聞いても「資本主義は今や爛熟し」とか「資本主義は絶頂期をすぎ」など、いつた調子で決めてか、つてゐるが、爛熟するやうな資本主義が日本の何處に存在するかは、私の護しんで聞かうとするところである。政府の保護によつて僅かに地固めをし、一度この保護がなくなれば、古家が崩れ落つるやうに崩壊すべき産業や資本主義は、爛熟でも、絶頂でも何でもありはしない。一體日本における産業の發達の程度が——國際經濟會議に行つてその存在すらも主張出

來ぬやうな程序が、聲を大にして資本主義だの産業主義だのといはれるほどのものであるかどうか。私はまづ誰かこの點を明瞭にしてくれることを希望してゐる。

併しこんな詮議だては別として、日本が有するほどの産業の中心が大阪方面であることは疑へない事實である。大震災當時日本の帝都及び横濱一帯が全滅したといふので、日本の外國における信用は一時、高樓からびり落ちたやうに落下した。この時、日本の當局者は盛んに關東が消費地であつて、産業の中心地は大阪にあり、この方面には被害がないから、經濟界の影響は左程でないことを辯明し、外國人もこれを納得して、信用が引き返したことは何人も知る處である。

然らば大阪は何故、東京に増して經濟的實力があり、生産の中心地であるか。もし國家の補助、政治的便宜といふやうなものが經濟發達の上に非常に有利なものであるならば、過去三百年以上も國家權力者の膝下にある東京は、大阪に増して實力が出来て居らねばならぬ筈ではないか。然るに昔から底力のある金持は、寧ろ大阪にあつたやうである。これは何故であらうか。

二

これについては無論種々な理由がありうる。大阪が關西といふ比較的文化の高い、即ち購買力の

盛んな住民を控へて居る上に、支那、南洋その他の貿易地を有して居ることなどは、最も大なる大阪繁昌の理由である。併し問題はこれだけでは解決しないやうである。

現に支那とか南洋とかいふ市場は、近頃の事で、それは大阪の財的基礎をきづくためには、餘りに新しい發展である。また九州や中國を控へて居るから、産業が發達したのは確かに事實であるが、それも全般の問題を語つてゐるかどうかは疑はしいと思ふ。古い頃は各藩、各國は自給自足で貿易の類などは知れたものであつた。瀬戸内海の貿易は他に比して盛んではあつたが、獨り大阪地方を富ましめるほど盛んであつたかは疑問だ。

かりに關西の所謂ヒンターランドの需要が、大阪の生産を刺激したとしたところが、需要があるだけで直ちに生産が起るものではない。世人は東京と大阪を並べて、一を消費の地といひ、他を生産の地といふ。東京がそれほど消費の地であり、そして需要が必然に生産を促がすものなら、關東——殊に武蔵野からは何故生産が起らなかつたか。

今こそ大阪と東京の間は交通至便だが、その昔は箱根八里を越すことすらが、尋常一様な仕事ではなかつた。海の貿易だつてその通りで、紀の國屋文左衛門が蜜柑船を持つて來るのにも、生命がけだつたではないか。従つて古い時代においては、東京（江戸）の消費が、大阪の生産を産んだと

解するのは困難である。それはたゞ此の大昔のことではなくて、遠くない以前まで、日本のこの不満足な、非能率的な官有鐵道が、遠い兩都市をそれほど經濟的に、密接に結びつけたかは、元より疑問である。大阪から取るよりも、政府の補助を得るにも、便利な土地であり、關東平原は廣いので、東京を中心にして生産事業が起つた方が理窟にあひさうである。

いづれにしても問題は依然として残る。何故産業は東京に起らないで、大阪に起つたのだらう。私はこれは特志家にとつては面白い研究材料ではないかと思ふ。

三

私の考へるところによれば、大阪が産業において東京を凌ぐのは、重にその氣質や宗教のためだと思ふ。無論、私は前に書いたやうに、需要地を控へて居る事、また原料地（例へば九州の石炭、鐵の如き）に近い事等を考慮から取り去るものではない。私の意味はこれ等の表面的理由にも増して關西人と關東人との氣質の相違が現在の状態に至らしめたのではないかと考へるのだ。これは甲州人が成功してゐるとか、江州人が大きくやつてゐるとか、といふやうなことも關係のある問題である。

私の説明を待つまでもないことだが、産業を起すには、どうしても資本の蓄積が必要である。資本といふ意味を金と解しても元より間違ひはないが、刻苦して山を切り開いたり、田を耕やしたりするのも資本である。この資本が堆積して始めて事業が起る。もし資本がなければ、假りに如何に需要が盛んでも、生産事業を起すことは不可能である。それはこゝで繰り返すには、餘りに平凡な事實である。

そこでこの資本が、如何なる人によつて、また如何にして出来るか、問題になる。これについて考へつくことは、東京人——特に昔の江戸つ子は、資本を造り出すことには極めて不向きである一事である。彼等の誇りは宵越しの金は使はないことにあつた。即ちその日とつた金はその日の内に使つてしまふといふのである。かうして如何にして資本の蓄積が出来よう。

そればかりではない。宵越しの金を使はない彼等はまた、その氣象が五月の鯉の吹き流しのよゝに、物に凝滞せず、極めて派手に生活することを念がけてゐる。彼等の生活哲學は極端に現世的である。江戸の有閑支配階級の旺盛な消費の膝下にあつて、江戸の商人は非常に儲かつたに違ひない。彼等はこれを出來るだけ派手に使ひ、それでもなほ使ひ切れない場合には、着物の裏を、表よりも遙かに上等のものを使用するといふやうな馬鹿な真似をした。今でも日本の洋服の裏は絹での

ることに相場が決つてゐるが、西洋のものは裏に關する限り極めて粗末なもので、強くさへあればいゝといふことになつてゐるのである。

かうした心の持ち方で、資本が蓄積されず、また生産が起らないのは極めて明瞭である。だから東京には俠客とか、吉原とかいふ算盤のない消費階級は生れたけれども、資本家、實業家などは殆んど生れない。大富豪の内では三菱だけは偶然土地を持つて居たので、時勢の波に押され、誤つて金持になつてしまつたが、他の三井でも、安田でも底力のある金持は悉く他國人であり、或は他國で成長した勢力を、東京に延長したといつていゝのである。

東京のやうな大きな都市の資本系統が、他國の延長だといふことは驚くべき事實である。見よ、松坂屋の本家は名古屋であり、白木屋の本家は關西であり、松屋も東京者にあらず、三越も三井が元來關西に育つたものであるに顧みて、資本の根は關西にあるといつてもいゝのである。これ等に對しては江戸時代からの老舗の繁榮は何處にある。これ等は種々の理由はあるであらうが、東京人の氣質が資本を蓄積するやうに出來て居らず、従つてその基礎が極めて薄弱である點に歸せねばならぬ。

四

この東京の状態に比して、大阪の産業は流石に物がたい。これには前に繰返して述べたやうに、種々の理由はあるが、私はその最も重大なる理由として大阪人の氣質から見た資本蓄積の事實に歸したいと思ふ。

大阪人は東京人と違つて、馬鹿な消費はしない。東京などで婦人の生國が不明である場合などには、よく着物の裏を見る。そして新聞などでも自殺者などがある場合に「着物の裏や、下着が粗末だから關西人であらうといふことにその筋の鑑定は一致してゐる」といつた記事があるのに、われ等はよく注意するが、彼等はそれほど無用なる消費を謹しむのである。一人が假りに一年に一圓づゝ浪費をしないとすれば、一千萬人では一千万圓の資本がそこに蓄積され、十ヶ年では一億圓といふ金が、少しも注意されない間に、堆積するのだ。一ヶ年に一圓で、それだからこれを決して馬鹿に出來ない事實である。

この昔から堆積した資本が、誰かの手にあれば、事業は何時でも起りうるのである。品物の需要が、外國から來ようが、關東方面から來ようが、彼等は資本の用意が充分であるから、直ちにこれ

に應ずる設備を造りうるのである。これが大阪が日本の産業の中心に在る重要な理由ではあるまいか。その證據には大阪の産業は、多くその資本を同地方から得て、東京のやうに外部に仰いだり政府にすがつたりして居らないではないか。

然らばこの謂ふところの「氣質」とは何か。私はこの氣質は宗教を外にして語ることは困難だと思ふ。國民の氣質が、それに向くやうな宗教を生むのか、或は又宗教が氣質を生むのか、それは何れにしても、この二つがインターデペンデントの關係にあつて、離れられないものであることは否定出来ない。かうして産業問題に宗教が重要なポイントをつとめることになつて來るのである。

大阪及び關西方面の宗教は、多く眞宗である。その教へは現世を穢土と見て、將來に望みをつなぐ宗旨である。即ち本願寺を中心とし、現世の苦難にたへて、未來を待ち望むのがその中心思想である。それが極めて消極的であるのは缺點であるが、かうして現代の苦難に耐へ身を持することが薄いといふ事實が、資本の蓄積には最も好適であることを示すものである。

この關西の宗旨に對して、關東の宗旨を代表するものは日蓮宗である。現世的で、陽氣で、それに天下國家といふやうな極めて抽象的な、根柢のない教理を説いてゐるのが、この教へである。われ等はこの信者の内容のない、空虚な大言壯語を聞いてゐると何時でも馬鹿らしさと腹立たしさで

一杯になる。あの宗旨の幹には、間違つても蓄積などといふ地味な考への枝は生れまじく、従つてそれから産業が発達するであらうことは、到底想像するに困難である。

眞宗と日蓮宗——かりにこの二つの代表的な宗旨を並べて、この中から經濟の因果を繰り出すことは出来ないであらうか。

五

經濟的の繁榮を宗教の原因に歸するものは、併し決して私の創意ではない。近頃米國の經濟的繁榮とビュリタニズムと結びつけて研究してゐる者が少なくなく、現にそれに関する二三の著書もある。

私はこゝで深い研究を避けて、バートランド・ラッセル君の小論から、その代表的な議論を引照しよう。同氏は米國の産業が造り出した新文明に驚嘆しその原因についてかう云つてゐる——
「米國の經濟的繁榮は無論、その多くを自然富源に得て得るが、併しそれと同時にビュリタニズム（新教）に得て居る。これはスペイン人がラテン・アメリカに對して如何なる結果を得て居るかといふこと、ビュリタンが合衆國を如何に利用したかといふ事實を比較すれば明瞭になる。何故

ならラテン・アメリカの富源は同じく非常に多いからである」
ラッセル氏はかういつて来て更に説明を加へていふ。

「ビュリタニズムは現在の快樂に代ふるに將來の報酬を以てすることを教へる。元來の意味からいへばこの報酬といふのは來世においてあるのであるが、併しこの長い教練の結果は、この將來の報酬といふのは自然に老齡になつてからといふ風習を買ふことができた。ビュリタンが現在の快樂の誘惑に抗する力が、貯蓄の習慣を作る最大な要素となり、またこの貯蓄が産業主義に必要な資本を産み出す役目をつとめたのである。」

以上ラッセルの説が、われ等に對して相當にサヂエスチヴであるが、かれは進んで更に他の半面を説いてゐる。曰く

「ブユリタニズムには更に他の半面がある。快樂のセンスを否定する宗教は、自然に人間をして力の快樂を望むことに向はしめた。米國の文明は以前の如何なる文明よりも、征服力の意志の上に立つてゐる。殊に物質的境遇を征服せんとする力の上に立つてゐる。米國のビュリタニズムが衰へるに従つて、人々はこの力から得る満足が益々減少して、他の富が買ひ得る快樂に向ふことになるであらう。さういふ時期が來れば、機械文明は今より不成功に、今より不満足な状態になる

であらう」

宗教が一國の産業に如何に働くかは、簡單であるが以上の説によつても、その片鱗が分ると思ふのである。

私はこの邊の素人としてこの問題について何等の斷定を下したくない。私は世の篤學者にして宗教と産業、東京と大阪の關係を、かうした方面から研究すべきもの、生れる必要を思つて、一應の思ひつきを述べたにすぎない。

もしかうした事に關して研究の歩が進めば、更に第二の問題は自然に生れるであらう。明治以後の日本の教育及び宗教は強烈なる國家主義である。國民の注意と努力はこの點にのみ集注され、日本の從來の宗教の如きは、この新宗教を輔佐するためにすぎないのである。この日本の新しい宗教と現在の産業とは如何なる關係があるか。日本の産業の行きつまりは、この點にも多少の關係はないかといふ如きがそれである。

私は産業立國といふやうな文字の手前からでも産業の哲學的、宗教的、倫理的考察が今少し眞剣に研究されべきことを期待し、この點から産業日本の根本策が樹立されるべきことを望むのである。

(一九二八・六・〇)

6 張作霖の最後

一 事實の真相日を経て益々不明

張作霖は誰が殺したか。

かれが非業の死を遂げてから、最早數ヶ月の月日は流れた。しかも時日が経過すればするほど、その下手人の本體は不明になつて行くのである。生きては東三省の獨裁者として、正面から凝視する者すらなかつたほどの權威を有したかれが、四邊の明るい早朝、自己の領土内において、しかも自己の百官、護衛隊、憲兵に取巻かれて爆殺されたに拘はらず、その百ヶ日を過ぎんとする今、犯人については殆んど手がかりだにないといふのは何故であらうか。

張作霖が殺された頃、長男の張學良は兵を纏めて關内に入つた。父の訃報は元より逸早くかれのところに通ぜられたであらうのに、かれは中々奉天に歸つて來なかつた。かれが歸奉したのは、それから丁度二週間を経た後であつて、かれの親近者の傳へるところによると、かれは鐵道の守備軍の

一兵卒に身を變裝して、窺かに奉天城内に入つたとのことである。かれはその後人の顔さへ見ると——特に知つた西洋人などに對しては、執拗なほど「おれの親父を殺したのは誰だ」と聞いて歩いたといはれる。

張學良ならずとも父の仇が誰であるかを知りたいのは人情であらう。かれは今や推されて東三省の總司令であり、誰がかれの父を殺したかを調査するには絶好の立場に居る。しかも爾來數ヶ月餘、この點に關して奉天側から何等の光明が齎らされて居らないのである。これは何故であらうか。

併し奇怪なる事實はこれに止まらない。われ等の聞くところにして謬らなければ、支那においては南も北も、張作霖を殺した犯人を以て、日本人なりとすることに毫末も疑ひを懐かないまでになつて居ることである。最近、國民政府が張學良に對し、三民主義奉戴に關し、その言質の反古を責めるや「父の敵は俱に天をいたゞかず、日本を味方として諸君を敵とするやうなことは絶対にない安心を乞ふ」と使を以て云はしめた事實がある。この言葉にどれだけの決心と、重大性があるかは自づから別問題である。「おれの父を殺した者は誰だ」と問ふた者が、自からかう答ふるに至つた點に張作霖爆殺事件に關するかれの態度を知ることが出来るではないか。

日本においては従来この問題については、不思議なほど何事も論ぜられて居らない。支那問題が國內問題と同じやうな興味を有する現在においては驚くべきことである。その論ぜられない理由は無論種々あるであらう。第一は多数の者の無頓着に歸し得べく、第二には當時の新聞は擧げてその犯人を南方政府の便衣隊乃至は楊宇霆一派の所業の如くに報導したから、その通りに信じて居るのであらうし、第三にある一部のものはこの問題を深く調査することは結局日本のために非すと信ずるが故であらう。

併しながらその理由が何れにあるを問はず、日本が沈黙を守ることは、少しも日本のために事態を好化しないのである。支那と、そして世界の輿論は、日本の沈黙如何に關せず形造られて居る。日本が論議しないが故に、世界がこれを知らずとする者は、自己の耳を蔽ふて世上音のなきを安んずる如きものである。日本は始めから積極的にこの問題に關し事件の真相を調査すべきであつた。そしてこの點において田中内閣は、その責務を果すに充分であつたといへないことは後段説く如くである。

二 張作霖の都落ち

張作霖爆殺の責任者が何人であつたかを詮議する前に、われ等は順序としてまづ當時の模様を知つておく必要がある。

昭和三年の春、雪が解けて支那の所謂戦争シーズンが始まると、南方軍は先年來の繼續事業である北伐を開始した。途中、濟南において日本軍と衝突し、一時出鼻を折られた觀があつたけれども北伐そのものは大した障害を受けずに、閻、馮、蔣の三軍は三方面から京津に攻めよつた。當時、大元帥として北京に頑張つてゐた張作霖は、持前の強氣から飽くまで一戦を交へる氣で「敵は二十五萬、われは四十一萬の兵力があり、銃器、彈藥も南軍のそれに比し著るしく優勢だ」とて兎角引き込み勝ちであつた周圍を叱咤し、身を以て教へるつもりか、その頃になつて最もお氣に入りの第五夫人を、わざ／＼奉天から呼び寄せたりした。

かうして大衝突の機熟して居つた時、日本政府は突然芳澤公使を以て、張作霖に對し關内を引揚げ東三省に歸ることを勸告した。張作霖がこの勸告を如何に憤慨を以て迎へたかは當時の聯合通信がこれを傳へてゐる。

「張作霖氏は極めて嚴肅なる面持ちで有野通譯官の通譯せる右覺書内容を傾聴してゐたが、談一度引揚勸告に移るや、にはかに昂奮の色をみせ、京漢線方面における奉天軍は極めて有利に進展しつゝあり、關外引揚

の要は断じてない。京津地方の赤化は國民のため忍びざることで、予は最後まで赤賊を防止する。日本が支那赤化の脅威を受ける結果となることは不利であると、持前の肝癪を起し、怒りに頬を痙攣させ腕を振りつゝ、足音を室内を歩き廻つた』

他の外務省邊から出たと思はれる記事には「激昂の餘り言語を發する能はざる有様で會談四時間に亘るも議論終結せず」とあり、いづれにしてもかれが如何にこの勸告に不快を感じたか、解る。(この時の勸告といひ、最近の張學良に対する南北妥協反對の勸告といひ、一國の代表者を通して勸告することを、時候の撻撻ぐらるにしか思つて居らないのが田中外交の特長だ)。

張作霖は一時怒つて見たけれども、滿洲に育つて日本の恐さは骨身に染みて知つてゐる。かれは結局北京を撤退することになつた。今までの大統領の都落ちが、何時でも惨めだつたといふので、芳澤公使などの勸めもあつて、外交官連を招いて盛大なる別離の宴を催ふしたり、元老王士珍を招いて、治安維持の後事を托したり、かれは兎に角水鳥の立つ跡を濁さないことをつとめた。

張作霖一行を乗せた汽車は六月三日午前一時十五分といふに北京停車場を出發した。珍らしいほど月の明るい夜で、プラットフォームに張學良、楊宇霆、孫傳芳などと別れを惜むのが如何にも淋しそうに見えた。汽車が煙を吐き出すと軍樂隊が劉曉たる奏樂をしてこれを送つた。

汽車の發着は無論絶対秘密にしてゐた。天津についたのが三日午前六時廿六分で、三十分計り停車した後、一路奉天に向つた。山海關には吳俊陞が出迎へて居つたので、更に一つの車を加へるため四十分計り停車した。その後は何處にも停まらず、普通は屹度停車する皇姑屯驛すらも除行して過ぎた。

三 爆發當時の現状

六月四日午前五時半頃、張作霖は潘陽驛(奉天)に近いので起きてゐた。自用列車のスモークンダに、山海關から乗り込んだ黒龍江督辦吳俊陞と二人で話し込んでゐると、そこへ北京から同行して來た大元帥顧問儀我誠也少佐がやつて來て、二人の間に据つて話し込んでゐた。

列車が爆發したのはこの時のことである。儀我少佐自身の話しでは「午前五時半頃、クロス・ガードの下を潜つたかと思ふ頃、吳俊陞氏が張作霖氏と私に「寒いから外套でも着なさい」といひながら私の外套を着せかけようとした時であつた。私共の車の右前の方で大爆音起り、煙と車輪の天井が落ちて來たので、張作霖氏の顔も吳俊陞氏の顔も見えなくなつた」といふ。「大阪毎日」五日所載奉天特電。

それからその状況は當時、詳しく新聞に報ぜられたから書く必要はない。吳俊陞はまづ死し、張作霖も續いて死んだ。一緒に居つた儀我小佐は、幸ひに膝部に打撲傷と、顔、腕に微傷を負ふたのみで無事であつた。一行の死傷者は張の第六夫人及び婢女は即死し、従者に廿一名、衛隊に三十餘名を出だし、現場は奉天驛に近いこと、て、混亂の巷と化した。

この報が傳はるや、支那側は極度に狼狽した。彼等は直覺的に（大した理論的根據もなしに）それが日本人の陰謀であると信じ込んだ。支那兵は爆發直後、小銃機關銃を亂射した。張作霖の病室には日本人醫師は無論として、日本人は一切寄せつけなかつた。城内の人氣は殺氣立つて、日本人は多く引きあけた。日本學生にして通學の途中支那兵に刺されたものもあつた。甚だしきは平素は一人あけない城壁の上に砲兵、歩兵を多數あけて、野砲機關銃を据へつけたりした。元來、奉天邊では問題が起る毎に、支那人は必ず日本居留地に引きあけ、家賃の暴騰を見るのを常とするが、今回に限つては居留地に居るものも却つて城内に歸つて、奉天街の家賃が下落するといふ奇現象を示した。

それ計りではない。張作霖自身もこれを以て日本の陰謀だと明言したといふ説すらも傳はつた。即ち當日（四日）意識明瞭となつた時に、「今回の事件は日本の行爲に相違ない、一刻も早く張學

良、楊宇霆に詳報し、かつ南方軍とも提携して對策を講ぜねばならぬ」といひ、大元帥府秘書長談國桓を天津に派遣し、閻、蔣、馮の三者にも「今後支那全土をあけて、この日本側の陰謀に對抗せねばならぬ」と通告したといはれる。

これを日本側の陰謀と考へたのは、昔に張周圍のものばかりではない。私の知つてゐる某貴族院議員にして、支那に二十年近くを過して、支那人の間には極めて有力なる人が、その朝總理潘復の家に行つた。挨拶がすむと直ぐ「今朝、張作霖の列車が爆破されたが知つてゐるか」と聞いた。「知らん、何處で」と聞き返すと「満鐵の鐵橋下だ」といひながら、小さい聲で「オイ知つてゐるだらう、ほんとの事を話してくれよ」と云つたといふ。「その様子でこれは辯解したつて無駄だと感じて、私は何にもいふことを止してしまつた。實際また當時は何にも知らなかつたのだし」と、その人が後で私に話してゐた。

四 犯人を想像して

支那側が頭からそう信じてかゝつたといふことは、併しながら客觀的事實がそうであつたといふこと、は無論別である。

當時、張作霖の列車爆破と共に何人もの頭を擣つたのは「犯人は誰だ」といふ疑問であつた。そしてこれには大體五つのソースを數へ得た。第一には無論南方政府より派遣された便衣隊の所爲なりとする説であつた。これは常識的にも首肯し得られる想像であつて、當時南方唯一の敵は張作霖であつた。その後の變化でも判るやうに、かれの配下の若い有力者は何れも南方の指導精神及び勢力と一味の諒解あるに拘はらず、かれのみは頑としてこれに應ぜず、飽まで赤賊討伐を標的としてゐた。この大なる障害物に對して南方が何等かの方法を用ひて除き去らんと努力したであらうことは、容易に推測し得ることである。

殊に爆破事件の當日午前三時頃、「怪しき支那人三名潜かに滿鐵線鐵道堤を上らんとしつゝ、あるを發見せる我監視兵は直ちに之に近づき誰何せしに、該支那人は我兵に向ひ爆彈を投擲せんとしたるため我兵は直ちに其二名を刺殺したるに、他の一名は遂に逃走せり。我兵は該支那人の屍體を檢査したるに爆彈二個及三通の書信を發見せり。其内二通は全く私信に過ぎざりしも、一通は國民軍關東招撫使の書信の破片にして是等の點より考察すれば、南方便衣隊員なること疑なし（六月十一日陸軍省發表）とあり、南方の行爲なることが益々疑はれるのである。

たゞ残念なことはその屍體を支那官憲側に引渡さなかつたことであり、従つて支那側では便衣隊

が殺されたことを、共同調査で否定して居り、便衣隊所有の手紙なりとして發表された文書に對しても「支那人が書く文章にあらず」と一笑に附して居る模様がある。その後、南方に關係ある凌印閣を捕へて「有力な證據」を握つた旨電報があつたが、その後如何なつたか判明しない。

第二に爆破の主謀者として疑はれるのは楊宇霆である。楊宇霆が若手の勢力家として、大志をいだいてゐるのは以前から知れ渡つた事實である。殊に當時、かれの無二の腹心常蔭槐は交通次長として鐵道界を自由になし得る地位にあり、この人にして努力すれば、列車爆破のことは決して困難ではない。現に事件後二週間を過ぎて新聞は、左のやうな報導を傳へた。

「常蔭槐氏は十六日京奉線機務處長孫鴻哲氏と共に天津より唐山に赴いた際、孫氏が南軍と通謀しかれることが明瞭となり、張學良旗下の第三方面軍に捕へられた。然るに又孫氏の口より常氏の爆發事件に關係あることが判明し、常氏も直ちに同地で捕縛されたと傳へられる。もし常氏の捕縛が事實とすれば、これに關係し楊宇霆氏にも疑問の眼が向けらるべく延いては如何なる事件を引起すやも知れず（東京朝日六月十九日北京特電）

その後楊が殺されたとの風説が確からしいとして關東廳から報告され、閣議で話しの種になつたとすらある。

第三に疑はれるのは勞農ロシアである。今でこそこれを疑ふ者は餘りないやうだが、當時はロシアに對する疑惑が深かつた。東支鐵道において張作霖が一敵國である關係から、一應これを疑ふとは必らずしも無理ではない。

第四には楊宇霆以外の張作霖部下の不平分子である。さきの郭松齡の反逆以來、かれに表面歸順して居りながら、異志を抱くものは決して少ないといへない。この人々の策動も無視出来ないことである。

第五に疑はれたのは日本である。その爆發の現場が、日本の鐵道租借地なりしが故に、日本は正當以上に疑はれた。支那字新聞で南方便衣隊の所爲だと書いたのは日本人經營の盛京新報だけである。

五 問題の三條項

爆發後、支那側はこれに関し一切の記事を差し止め、日支兩官憲は直ちに現場について共同調査を行つた。共同調査の内容については後で説くやうに、支那側の拒絶により發表されないが、重點は左の條項を出でないであらう。

(一) まづ責任の歸するところである。これについては日本の陸軍省は早くも日本側に責任のないことを發表した。その趣意は「元來同所は京奉鐵道と滿鐵と交叉する地點で、滿鐵の鐵橋の下を京奉線が通つて居る關係から、日本が警備に當る場處であるのは事實だ」

「然るに今次張作霖の歸奉に際しては此交叉點に支那憲兵を配置して警戒し度旨六月三日支那側より申出であり、我守備隊に於ても時節柄支那側の申出も尤もの事と思惟し、各方面と打合の上支那側の申出を容諾し、支那側は皇姑屯驛より潘陽驛に至る約一哩の間の京奉線路上に騎兵及憲兵約五十名を配置し、此交叉點には三日午後八時頃より金中尉外數名の支那憲兵警戒配置につけり」

とて日本側の警備責任は上方の滿鐵線だけで、下方の京奉線については、全然これなしと主張してゐる。

(二) 次ぎに問題になるのは犯人が何人なるかである。張作霖の列車は發着の時間を秘密にしたのは無論として、その何番目の列車にかれが乗つて居つたかは、極めて少數の人より知るものはなかつた。當時の列車の編成は左のやうであつた。

(一) 機關車二輛 (二) 護衛隊乗用三等客車三輛 (三) 奉天側高官、張作霖第三息 (四) 一等客車三輛 (五) 同高官用津浦線一等甲鐵車一輛 (六) 張作霖乗用車(第八十號)一輛 (七) 食飲車」。

この長い列車において、外部のものが張が何の列車に乗つて居るかを、如何にして知り得たかである。況んや山海關で吳俊陞を加へたために、列車は編成替へをして居る。内部に策應者があるか、然らざれば餘程の通信機關を有して居るのでなければ、到底あのやうな手際を以て大事を行ふことは不可能である。即ち

- 一、同列車に同乗し、車輛の位置に通曉し、爆破敢行者に之を知らしめたもの
- 二、張作霖座乗列車爆破のため緩急宜しきを得、爆破場所附近で特に速力を緩めたる列車運轉機關従業員
- 三、爆破をした下手人

の三つが、獨立的にか、策應的にか行動したことは事實であらう。(一)驛までには尙一キロもあつて普通なら相當の速力を出すべきに、列車が爆破したにも拘はらず、後の列車が折り重ならないで、直線的に停車し毫も異状なかつた事實なども、除行した證據であり、(二)元來爆彈では汽車が燃えることはないのに直ちに燃えたことなども不思議だと、日本及び支那側の相當有力な技師が述べてゐる。

(三)つぎは爆破薬の種類及び装置の場處である。専門家の意見では黄色薬にあらずして、ダイナマイトであらう。そして藥量は少くとも三十キログラムを下らないであらうといはれる。然らばそ

の爆破装置の場所は何れであるか。鐵橋の上にあつたとすれば日本軍警備の責任であり、その下方乃至は列車に仕かけられて居つたとすれば支那側の責任である。日本軍部の發表では

「破壊の程度より見て爆薬量は相當大なるものと推測せられ、投擲せるものとは認め難く又張間(橋の)飛散の状態に照すも滿鐵線路の上面に爆薬を装置したるに非ざることは確實にして或は張間の下面若くは橋脚附近に装置されありしならんと想像せられあり」。

とあり。更に上海七月十六日發のルーター電報によれば

- 一、爆發は多量の爆薬を使用せるもので、鐵橋北側及び中央スマンの下方、及び側方にある北側ピアースに装置せられたものだ。
- 二、爆發装置は鐵橋の安全距離にある位置より電氣装置を以て行ひたるものなるべく、發電位置から電線によつて連絡せる電氣装置によつたものならん。
- 三、爆薬の装置及び發火方法は極めて専門的に熟練せる技能あるものによつて實行せられたものであらう。
- 四、専門家の判定によれば電氣装置による斯くの如き大爆發を行ふには熟練せる専門家四五名を用ひ行ふも六時間を要するであらう。

と報導してゐる。

六 日本を誣ふるものの論據

爆發事件に關する日支官憲の共同調査は、約一週間の後に完了したが、支那側は意見に相違ありとして、これが共同報告書の作成を拒絶した。

この内容については元より窺知することは出来ないが、七月十日のロイテル電報はこれに重要な説明を加へてゐる。同通信員は林總領事から外務省に提出した報告書を入力したとて曰く

「右報告中まづ驚くべき事とは、日支双方共爆發に關する専門家の意見を徴せなかつたことだ。次に

(一) 警備問題に關しては日本側は支那側司令官の要求で事件發生の前夜、鐵橋の下を監視するため、支那兵の派遣を許可したといふに對し、支那側は右は一旦許可されたけれども、六月三日午後八時支那兵派遣の際日本側はこれを拒絶したと主張した。尙この點に關する報告書の字句は極めて曖昧であるが、鐵橋及び橋梁の爆破状態を目撃したものは、恐らく爆薬が日本側警備區域たる陸橋の上部にある橋梁附近に設置せられたものであつたこととを推斷し得べく、果して然りとせば日本警備隊の目につかなかつたものであらう。

(二) 事件發生前、現地附近に起つた疑問の支那人三名の射殺については、支那側は全然事實を否認し、もし彼等にして日本側といふが如く連類者であるとすれば、爆發裝置を終つた後、態々手榴彈及び證據物たる

手紙を携えて、現地附近を徘徊するやうな愚をなさないであらうといつてゐる。

(三) 爆破の原因については、爆薬の猛烈にして電氣仕掛によつたであらうことは記載してゐるが、裝置所については何等の決定に達せないので、如く、單に橋上又は地上に裝置せられたものであることを記載せざるに止まる。(中略)その他或は橋柱の上とか、或は列車の上とか詳説をあげたるも、何れも證據をあげず、要するに事件の原因は依然不明だ」

外國通信は何れも日本に向つて不利な報導をしてゐるが、これを極めて大膽に發表したのは、リノックス・シンブソン(プットナム・ウィール)である。かれは北京に英文雜誌を經營し、兼ねて張作霖の顧問であつた。張の葬儀が行はるゝや、かれは奉天に赴き自からこの問題を研究して歸來後「張作霖を殺したものは日本の秘密結社である。そしてこれに日本陸軍のある部分の者が助けた」と公表したのである。かれは張學良とも交つてゐるから、かれの發表に奉天側の意志が含まれてゐると見て、であらう。かれはこれについて數種の理由をあげた。

(一) 日本人が鐵道交叉點に十二の八十ポンド爆薬機械を据へた。

(二) 日本人顧問(僕我少佐の事)が、交叉點を夜明けに通るべく汽車を除行することを勧めた(三) 日本軍人が交叉點の三百メートル以内に支那軍人の入るを許さなかつた(四) その晩日本兵は何人をも捕へなかつた

つた(五)日本人顧問は北京から同行したが天津で下りた(町野大佐のことであらう)(六)爆撃機一臺の自動車は列車の方に疾送して来た(七)ある有力な日本人が自分の家の屋根から汽車の到着を眺めて居り爆撃機に入つた(八)張作霖の部下が殺したのでない證據には張の死後かれに反旗を翻したものはないではないか。

かうした理由をあけた後、かれは大膽にもその下手人が黒龍會の如き團體であることを明らかにしてゐる。

『日本にはサラジエホカ殺したセルビアの如き團體がある。例へば黒龍會の如きで支那の事件に興味を持ち、廿一ヶ條の要求を製造し、壯士を雇つてなく。日本の行政長官が爆撃事件後、奉天より送還したる如き人間がそれである』。

このシンプソンの説に對しわが外務省も黒龍會も英字新聞においてこれを否定した。(八月十八日ジヤパン・アドバタイザー紙参照)殊に外務省の反駁はシンプソンの理由十ヶ條を一々駁し、更にその下手人が日本側であり得ない事七ヶ條をあけてゐるが、その何人の手になつたかは知らず、強い議論の上に立つてゐる。

七 所謂支那浪人の策動

支那人及び一部の西洋人が主張する「日本」といふもの、限界は極めて不明である。それは時に無名の個人を意味し、また時には政府をも意味する。

もし張作霖爆撃の陰謀が日本政府によつて計畫されたといふものあらば、識者は決してこれを信じないであらう(かれの關外撤退を勸告したのは田中内閣だから、爆撃の責任も田中にあるなどといふ遠廻しの議論は別として)。田中首相は張作霖の將來について、餘り多くを期待しなかつたのは事實であるが、この人なき後に東三省を統治する者なきに願ひて、暫らくかれを利用するつもりでゐた。それも今までは大元帥として鼻息が荒かつたので、かれが旗を卷いて一應奉天に歸れば直ちに、繼續中の土地商租權問題や鐵道問題を押しつけて解決する意志を持つてゐたと信すべき理由がある。故に、張の死亡によつて豫定の筋書が狂ひ、最も失望したのは恐らく田中首相であらう。われ等の常識は安心して、この事件に政府の手が加はつてゐなかつたことを斷言し得ると思ふ。

併しながら支那及び支那同情者が、「この陰謀の蔭に所謂壯士の活動があつた」と主張する點は實際の證據は何にもないが、や、疑問を存してゐる。當時の新聞に出たことであるが、田中首相は

林權助男をして張學良にいはしめて「日本政府の意志は林總領事を通してのみ通知するから、他の人の言を信じてくれるな」と繰り返し述べた。一國の政府の意志が、その國の正式代表者の口を通して相手に傳へらるべきは、餘りに明白すぎる事である。然るにこの事を特に高調せねばならぬ理由は何處にあるか。それは林總領事以外に活動する者があるのを示すものに外ならない。

元來、滿洲における日本人の策動は團體中心であるよりも、個人中心であるやうである。従つて所謂滿洲浪人が何を考へて居るかを全體として斷定することは困難である。ただ彼等の内に眞面目に滿洲獨立論といふ如き空想を畫いてゐる者のあるのは否定出来ない。かれ等の筋書によれば、張作霖の如きは昔から日本の厄介になりながら、日本に酬ふるところを知らない。故に日本としては別な方法を講ずる必要があるといふのである。

この筋書から出たものが、滿洲人のための滿洲といつたやうな標的から、今は天津に居る宣統廢帝を連れて來るとか、大連に居る恭親王を推戴するとかといふ芝居である。この筋書を實行するには、併し平和ではいけない。滿洲を一應擾亂の巻に陥れて、細工は粒々仕上げを見てくれといふわけである。

かうした目で見ると、如何にも張作霖爆殺後、種々な不思議な事件はあつた。安奉線で爆彈を所

持した日本人が捕へられ、時節柄記事掲載を差止めて調査したのは事實だ。捕へられたのは二人で一人は本溪湖、他は安東で發見捕縛された。また不發に終つたけれども、東支鐵道西線（ハルピンの西方）の海材で、ある日本人が爆彈裝置を試みたといふ事實もある。

爆殺事件があつた後で、奉天の日本人居留民會を始め、一夜に六七回つゝ、家屋が爆破され、新聞は筆を揃へて南方便衣隊の所業なることを報じた。新聞記者が支那官憲に詰問すると

「巡警を増し憲兵を派して商埠地の警戒を嚴にする積りであるといつて居るが、なほこの事件に對する犯人の見當については笑つて多くを語らなかつた」（東京朝日十二日奉天特電）

とある。「笑つて多くを語らない」は意味深長ではないか。

不思議なことは「張作霖を殺したのは自分だ」と料理屋などで豪語するものが二十人も三十人も居ることである。官憲が調べてみると爆彈に關する初歩的な智識すらもないといふ滑稽な事件もある。またある關東廳の高官のところに来て「張を殺したことにして南方人を南京に届けたいから、〇〇〇〇圓計り出して貰ひたい」といつて來たものもあるといふ。日本の新聞に宣統廢帝を擁して東三省に大清帝國を復活する運動が流行したと大きく報ぜられたのもこの頃の事である。

説いて明らかであるを得ないは遺憾であるが、一部人士の策動の様を知るべきではないか。

八 根本的調査を要す

三五四

先頃、シアトルに國際會議が開かれた。そこへ日本からは英文學者の頭本元貞君が出席した。丁度その前に爆發事件があつたので、この問題が必ず話題の中心になるだらうと思つて、同君は態々奉天に行つて調べあけた。そして澤山の材量を探つて出かけたものである。

然るにシアトルにおいても、またウィリアムス・タウンにおいても、これが少しも問題にならぬ。ブットナム・ウィールの記事なども新聞の隅にか、けたぐらゐるだとのことで、かの排日家ハーストのプリズベーンすら『日本に政府があるのだから、秘密結社の黒龍會が下手人だつたら、これを捕へるだらう』と、クー・クラックス・クランにあてつけたに過ぎないと話してゐた。

これによつても分るやうに、支那の宣傳は從來の宣傳に溺れすぎて、最早英米の識者の注意を惹くに足らない。故にこの事件に關しても、支那における一部外人は別として、大勢が日本に非常に不利に動くやうなことはないかと思ふ。

併しながら前述した通り事件の始めから日本に深い疑問がかけられて來たのは事實である。そして爆發事件が相當周到な準備を必要とする點から、軍部をまで誣ふる者があるのである。田中内閣

は何故最初に、斷乎として徹底的にこれが調査をなし、苟くも疑ひのある者は悉く糺明して、事實を天下に明らかにしなかつたか。個人として自己の短見から國家を謬つたものは今までとて決して少なくない。三浦子の朝鮮王宮事件、李鴻章、ロシア皇太子等に對する加害などはその例である。しかも當時は何れも極めて公平にこれ等を調査して責任の歸するところを示してゐる。

今回の事件においても日本だけが不利な批難を受くべき理由はない。南方の便衣隊、楊宇霆一派に對する疑ひなどが何時の間にか去つて、日本だけが疑問の矢表に立つに至つたのは、田中内閣がその事件を明らかにするに怠慢であつたからである。警備の責任が先方にありとの主張を以て、萬事終れりとする如きは事の輕重を知らないものである。今こそ南方政府は強敵張作霖が殺されたので喜びと満足から黙つてゐるけれども、喉元過ぎた後は必らず、これを以て日本を打つ道具とすることは明らかである。

先頃、田中首相は對支政策に關して伊東已代治伯を訪問した。この時に伊東伯はこの張作霖爆發事件を持ち出して、政府が何故これを根本的に取調べなかつたかを責めたとのことである。その人を以てその言を捨てず、私はこの點で伊東伯の説に贊する。一國に對する外交は正邪を明らかにすることから始まる。私は田中内閣の名譽のためにも——西比利亞出兵、滿洲緩衝地帶説の本案とし

三五五

て、田中首相自身が浪人の策動に近い考へを有しては居らないだらうかといふやうな疑ひを晴らす
だけでも、田中内閣がこの事件を根本から調査して、苟しくも手の黒きものあらば寸毫も假借せざ
ることを希望せざるを得ないのである。(昭三・九・六)

(附記) 右は日本における恐らくは唯一の同事件に関する記述であらう。その後記事が掲載禁止になり
會で問題になつたけれども、新聞には發表されなかつた。現在からいへば書足したいこともある
けれども、それは許されない。

自由日本を漁る (をばり)

昭和四年四月三十日印
昭和四年五月五日發行

自由日本を漁る
定價金壹圓八拾錢

著者 清澤 冽

發行者 野澤 廣
東京市神田區三崎町二丁目一番地

印刷者 廣瀨 大三郎
東京市麹町區飯田町五丁目三十五番地

發行所

東京市神田區三崎町二丁目一番地
博文堂出版部
電話九段一五四五番 振替東京五六〇二六番

エト 2266

同 著 者 に よ る 著 書

米 國 の 研 究

(大正十四年十一月發行)

モ ダ ン ・ ガ ー ル

(大正十五年十一月發行)

黒 潮 に 聽 く

(昭和三年四月發行)

自 由 日 本 を 漁 る

(昭和四年四月發行)





